
予定通りに行かないのが人生だ

深水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予定通りに行かないのが人生だ

【Nコード】

N9453B

【作者名】

深水晶

【あらすじ】

井上覚は自宅マンション前の路上で泥酔している変な女・中島理子を拾って一晩泊めた。その後、同じ社内の新人・深川由貴奈と付き合い始めたが……。

第一話 変な女

俺はお人好しでも博愛主義でもなんでもない。なのに、何故こんなことになっているんだ。

あえて言うなら、猫は好きだ。でも飼うなら犬の方が良い。

どちらかと言えば、女は物静かで女らしく聡明で、できることならば美人の方が良い。

二級建築士の資格は一応取得しているけれど、一級建築士資格は二度落ちている。

再来年三十歳になる予定の独身、大学卒業後すぐに別れて以降恋人なし、の俺、井上^{いのうえ}覚は変な女を拾って、今、途方に暮れている。

「あのね、そういうわけだから、一晩だけ泊めてください」

目の前の女はそう言ってペコリと頭を下げた。ふわふわの柔らかい茶色の髪が揺れて、甘いシャンプーの香りを鼻孔に届ける。

「何故だ？」

理解できなくて、納得いかなくて尋ねると、女は眉間に皺を寄せた。

「だから！ 部屋中どこもかしこも水浸しなんです！！ 上階の住人のせいで！！ 今日寝る場所がないんです！！」

「それはさっきも聞いた」

そうじゃなくて。

「じゃあ、なんで聞き返すんですかつ！！」

キッと睨みつけて、女は怒鳴る。

「事情は判った。だけど、何故俺に言う？」

「そんなの、あなたしか目の前にいないからに決まってるじゃないっ！！」

泥酔しキレた女の叫び声は、仕事に疲れてささくれ立っている俺の耳には痛すぎる。

ハンドバッグで殴り付けられ、俺は顔をしかめた。

現在住んでいるマンションはすぐ目の前。歩いて五分かからない距離だ。

そろそろ十一時になろうとする時刻。道端で泥酔し、泣きながらうずくまる女を見つけて、つい声をかけてしまったのが、運のつき。酔っ払いには、道理も常識も、全て無意味だ。

ため息をついて、立ち上がる。……疲れた。

「ちょっと!？」

女が悲鳴を上げる。

いちいち説明するのも面倒臭い。諭してやる程の気力もなければ、女をホテル等の宿泊施設に連れて行って置いてくるだけの余裕もない。

俺は今すぐ家に帰って寝たい。心底思った。二度と道端に落ちている変なものは——特に生物——今後は決して拾うまい。触れず、話しかけず、見て見ぬふりをしよう。君子危うきに近寄らずだ。

「すぐそこだ。一晩だけなら泊めてやる」

こんなにお人好しな質じゃなかった筈だ。しかも、目の前の女は好みでも何でもなければ、知り合いですらない。

青天の霹靂。俺にとって不意に降って湧いた災難だ。

これ以上話をして也会話すら成立しない。無駄な労力を払って、無駄に気力と体力を消耗したくなかった。

見るからに怪しげな女に、手を差し出してしまったのは、心身疲れきって思考能力が低下していたからに違いない。

おそらく、俺はその時、酔っ払いと然程変わらぬ思考能力、意識レベルにあったとは思えない。

気の迷い、気の緩み、疲労、倦怠。

俺はその変な女を連れ帰って、まだ何かごねてぐずる女をソファに寝かしつけて、布団をかけてやり、スーツを脱いでハンガーにかけ、全て脱いでベッドに潜り込んだ。

泥のように重かった。夢も見ないで熟睡した。

第一話 変な女（後書き）

やめておけば良いのについて書いてしまいました。
井上覚と中島理子出会い編。

第二話 非常識

学生時代、三十歳になるまでには、建築士として自分の理想の家を立てられる程の経験と知識を蓄え、理想の家を建てて、将来に備えたいと思っていた。

当時付き合っていた恋人とは高校時代から五年の付き合いで、おそらく彼女と結婚することになるだろうと思っていた。

予定通りに行かないのが人生だとは言うものの、俺は何一つ夢を叶えられていない気がする。

まだまだ結婚したいとは思わない。できるとも思えない。

理想の家を建てるのなどは、夢の夢。俺はしがないサラリーマンだ。普通より多少は給料が多いかもしれないが、俺より多い人間はいくらでもいる。

成功も失敗もしていない。中途半端で、上司、クライアントに逆らうことなく、強く自己主張することなく、無難に柔軟に人と争うことなく生きてきた。

腐ってはいない。だけど疲れていた。

土日祝日もないような、毎日さして代わり映えない日常。

昼食はコンビニ弁当か宅配、ファーストフード。

夕食はそれに加えてファミレス、深夜営業のラーメン屋だ。

後悔はない。仕事はそれなりに充実していて楽しい。時折嫌な事もあるが、それは仕方ない。そんなものだ。

平穏な平凡な日常は愛すべきものだ。波乱に満ちた災難よりは、ずっと良い。

いつも通りの朝にはならなかった。

何故なら、女の悲鳴で目が醒めたからだ。

「……何だ？」

昨夜の記憶は飛んではいなかった。だから、それがあの変な女のものだということは判っていた。

何やら騒ぎ立てている様子に不穏なものを感じながら居間へ向かうと、女の悲鳴に迎えられた。

朝からうるさい。

「な、な、な、何なのよ、あんた！ あんた誰なのよ！！」

それはこちらの台詞だ。俺は未だに女の名前も知らない。知りたいたとも思っていなかったが。

正直、得体の知れない女に名乗りたくなかった。

「昨夜のことは覚えてるか？」

「お、覚えてないわよっ！ あんた、何をしたのよ！！」

俺は肩をすくめた。何もしていない。したのはむしろ女の方だ。

「泥酔して人に絡んだ記憶は？」

「え？ 何よ、それ」

女は真顔で問い返す。

「部屋が水浸しで寝られないから一晩泊めろと言われて泊めた。判ったら、出て行ってくれ」

俺が言うと、女はマジマジと見つめた。

「したんじゃないの？」

きょんとした顔で聞かれる。

「好みじゃない。それに疲れていて早く寝たかった」

「……だから見ず知らずの女を家に連れ帰ったの？」

女は奇妙なものを見る目つきで俺を見た。

「出来ることなら関わり合いになりたくなかった」

そう言うと、女はますます不思議そうな顔をする。

「って事は私、迷惑かけたの？」

「そうだ」

判ったらさっさと出て行って欲しい。

「じゃあ、お礼に朝食作ってあげる」

「……は？」

一瞬、何を言われたか判らなかった。

女はスタスタとキッチンにある冷蔵庫に近付いた。

「余分なお金持っていないから、働いて返す。それで良いでしょ」

「待て。何を……っ」

女は冷蔵庫の扉を開けた。そして中をじっと見つめてから、無言で閉めて、振り向いた。

「使わない冷蔵庫の電源コードは抜いておく。常識でしょ？」

非常識なのはお前の方だ。

第三話 お礼

「他人の家の冷蔵庫を勝手に開ける人間に、常識について語られたくない」

「けどどうせ空だったじゃない。プライバシーの侵害にはならないわよ」

十分過ぎる。

現在時刻は五時四十分。出社までにはまだ余裕があるが、朝っぱらから、問答したくない。

「何もしなくて良いから出て行ってくれ」

「でも迷惑かけたんでしょ？」

「君に長居される方が迷惑だ」

近隣の住人に見られたくもない。

「でも、絶対ろくなもの食べてないでしょ」

「君には関係ない」

「関係ないって、そういう言い方……」

女はふと、目線を下ろし、何かを見つけて固まった。

「何だ？」

「……パンツ」

女が呟いた。

「は？」

「パンツ一枚。しかも裸だ」

おもむろに女が歩み寄り、ぺたりと手の平で腹をそつと撫でた。

「な、何をして……」

「うーん、どうしようかな」

ぺたぺたと何かを確かめるように触りながら、女は呟く。

「何をしてるんだ？」

「うん」

そう言って女は頷き、にっこり笑って俺を見上げた。不覚にも、

可愛いと思ってしまった。

「やっぱり栄養状態あまり良くなさそうだから、何か作るよ。ね？」
下手な勧誘より質が悪かった。落ち着かない気分になって、慌てて女を引き剥がした。

「とにかくすぐに帰ってくれ」

「……実は」

女がポツリと言った。

「あと二日程泊めて貰えると、有り難いんだけど」

「はあ!？」

何を言ってるんだ、この女。非常識も良いところだ。

「ダメかな？」

首を傾げて言う。

「他へ行け」

「一緒に寝ても良いって言っても？」

一瞬、喉の奥まで干上がった。

「……駄目だ」

「そっか」

女は呟き、にっこり笑った。

「お兄さん、良い人だね」

そう言われて、ため息をついた。

「別に。それよりも仕事に行かなくちゃならないんだ。君には構ってられない」

「じゃ、名刺か何か連絡先教えてよ」

「何故だ？」

「お礼するから」

「必要ない」

そう言うと、女は困ったような顔になった。

「私もそろそろバイト行かなくちゃならないし」

「じゃあ、行け」

「だけど何かすっきりしないな」

「なら礼でも言ったらどうだ？」

「あっ、そうか！」

女は今気付いたという顔をする。

「有り難う、ごめんなさい。一晚泊めてくれて有り難う」

女はそう言って、深々と頭を下げた。

「ところでここって何処ですか」

住所を告げると女は微笑んだ。

「じゃあ、すみませんでした」

女はそう言って、バッグを拾って出て行った。

急に静かになって、部屋の温度が僅かに低くなった気がした。

「……嵐みたいだったな」

呟いた声が、やけに響いた気がした。

それは台風の後の静けさだ。

俺はため息をつき、出勤の準備を始めた。

第四話 生物

二度と会わないだろうと思って別れた女と、数時間と経たずに再会してしまった時、人はいったいどう振る舞うのだろう。

少なくとも俺は真っ白になった。言うべき言葉も、するべき行動も何もない。

糸の切れたマリオネットみたいに、動けなくなった。

それは家のすぐそばのコンビニ。女を拾った道のすぐそばでもある。

「あ、いらっしやいませ。って、ああー！ 今朝のお兄さん」

うるさい、黙れ。黙ってくれ。他人の視線や耳が気になって、思わず女の口を押さえて塞いでしまった。

しまった。余計に、怪しい。冷や汗が出る。

「お、大声出すな。迷惑だ」

そう言ってゆっくり手を離す。

「朝食買いに来たの？」

タメ語だ。俺が客だという自覚はないらしい。

無言で睨むと、不思議そうな顔になる。

だいたい何故、見ず知らずの女に慣れ慣れしくされた上に、兄さん呼ばわりされなくちゃならないんだ。

「その呼び方はやめてくれ」

「だって名前知らないもん」

女は名札を付けていた。その表記が正しければ、中島というらしい。

「井上だ」

「下は？」

「君には関係ない」

そう言うのと、女は首を傾げた。

「口癖？」

そういうわけじゃない。それが単なる事実だからだ。
少なくとも俺は関わりたくない。

「それはそうと、弁当なんか買うのやめなよ、井上さん。どうせ偏食で野菜や果物ろくに食べてないんでしょ？ 塩分糖分多いし、添加物入ってるし、身体に悪いよ？」

「俺は一応客なんだが」

「とりあえず私が作った弁当あげる。時間なかったから適当で超手抜きだけど、手作りだから。ちよつと待ってて」

「は？」

なんなんだ、この女。人の話を全く聞かない上に、このマイペース。

「待て。そんな物はいらないから……」

「遠慮しないで、井上さん。じゃ、ちよつと待ってて。……カズリン、ちよつと裏へ行つて来る。すぐに戻るから、暫くよろしく」

「はい、リコちゃん」

リコちゃん？ 察するところ、下の名前はリコというのだろうか。

そんな事はどうでも良い。

「待て。そんな弁当なんか食べてる余裕はない」

「昼に食べれば良いじゃない」

「入れ物はどうする気だ」

「この店に届けてくれれば問題ないよ。弁当箱は三種類持ってるし」

「そういう問題じゃない」

なんで、人の話を聞かないんだ。

「必要ないって言ってるんだ」

「井上さんには必要だよ。肉付き薄いくせに、下腹出て。あれはぜい肉じゃないよ。お腹にガスが溜まってるの。だから繊維質取らなきゃ。それに顔色悪いよ。ビタミンとミネラル取らないと。胃腸の調子もあまり良くなさそうだから、揚げ物はやめた方が良くよ。味付け薄めの煮物なんか良いよ、大根の。ま、騙されたと思って食べてみて」

「……………」

思わず絶句した。何故そんな事が判るんだ。しかもいつの間に、そんな分析していたんだ。俺は呆然と立ち尽くす。

そうしている間に女がピンク色の可愛らしい弁当袋を抱えて戻って来た。

「はい」

「……………」

思わず女と弁当袋をじっと見つめてしまった。

「毒とか下剤とか睡眠薬とか仕込んでないから」

「は？」

何を言ってるんだ？

「だから、安心して食べて良いよ」

「……………」

なんなんだ、この奇妙な生物は。

「一つ聞きたい」

「何？ 井上さん」

「ガスが溜まってるとか胃腸が悪いとか何故判った？ それにビタミンやミネラルが不足しているとか」

「だって胃下垂じゃない。それに触って確かめたし」

それって触って判るものなのか。それ以前に触って確かめるものなのか？

「あとは勘？」

……………

「勘なのか？」

「うん。頭で考えるより、勘の方が確かだよ」

なんて滅茶苦茶な女なんだ。しかも、頭が悪い。ものすごくおかしい。なんなんだ、これ。首に縄つけずに放し飼いにして良い生物なのか。

俺は呆然と見つめてしまった。

「ところでもう七時半近いけど時間大丈夫？」

大丈夫じゃない。遅刻だ。慌てて押し付けられた弁当袋片手に、走り出した。

第五話 安寧

宝くじに当たる確率と、変な女に遭遇する確率は、いったいどちらが高いだろうか。

そもそも宝くじは買った事がないから当たりようがない。だが、今なら何か当たる気がする。根拠はないが。

かろうじてギリギリ間に合った通勤電車の中で、吊革につかまり揺られながら、ため息をつく。

どうも妙な事になったものだ、と思う。見知らぬ素性の知れない女から無理矢理押し付けられた弁当なんて、有り難みは半分だ。

そもそもあそこまで言われるほど、健康状態が悪いとも思っていなかった。

しかし、と思う。あんなに変な女には、これまで出会ったことがないな、と思った。唇が弛む。

毎日は困るけど、たまになら良いか。下剤や睡眠薬は入っていないらしい。自己申告だけ。

そう言えば、自分の体調や健康状態なんか心配されたのは久しぶりだな。

両親には長らく会っていない。大学卒業後、地元に戻らず就職した。兄弟は姉と弟がいる。弟は今、大学生。姉は結婚して実家を改築し、親と同居。

既に実家に俺の部屋はない。帰っても様変わりしていて、自分の家だという気がしなくて落ち着かない。

その上、元気な甥姪がそこら中駆け回っていて、うるさい。可愛くない事はない。むしろ意外と叔父バカな方だと思うが、あのパワーに毎日振り回されたら、ついていけないと思う。

それに最近、帰ると結婚はまだかだの、見合いがどうのとか言われるから、必要以外には帰らない事にした。どうせ仕事も忙しい。

高校から大学、卒業後の一ヶ月半ほど付き合っていた恋人の有子^{ゆうこ}は、伝え聞いた噂では、同じ社内の男と結婚して寿退社、一児の母らしい。

詳しい事情は聞かなかった。好きな人ができたと聞いた時から、同じ社内か、でなければ会社関係で知り合った男だろうと思っていた。

俺は別れるまでの一ヶ月半、ほとんど有子に会わなかった。一応最初の二週間は、メールや電話は一日一回は必ずするよう心がけた。だけど、それが限界だった。

慣れない仕事に忙殺されて、自分のことだけで手一杯だった。余裕なんかなかった。

俺は上等な彼氏とは言い難かったし、一時は本気で恋人の事を忘れていた。忙しい時期を乗り越えて、一段落ついたところで、ようやく思い出した。

その時、一ヶ月近く電話をしなかった事に気付いた。受信履歴は数件あった。後でかけようと思って忘れていた。書きかけのメールはあったが、送信されていなかった。きっと怒ってるだろうなと覚悟した。だけど、意を決して会った有子に告げられたのは、別れ話だった。

有子は淡々としていた。話を聞く間、俺は呆然とし、そのため無口になった。

『冷めているのね』

と言われた。冷めていたわけじゃない。動揺して、何も言えなかった。顔も強張って笑えなかったし、指先は僅かに震えていたから、珈琲も飲めずに、膝の上で固く握りしめていた。

好きだと言ったら、まだやり直せたのだろうか。だけど、有子の俺を見る目は冷たかった。俺は何も言えず、うつ向いていた。

『覚の浮気を疑ったわけじゃないの。だけど覚は私のこと、そんなに好きじゃなかったでしょ？』

俺は泣きそうな気分になった。そんなこと言われたくなかった。

他の誰に言われたとしても、有子にだけは言われなくなかった。

他の誰が理解してくれなくても、有子だけは俺を判っていてくれると信じていたのに。

俺がどんなに有子を愛しているか、わざわざ口に出して言わなくても伝わっていると信じていたのに。

俺のちょっとした仕草や目線で、有子は驚くほど明確に、俺の意図や考えを見抜いてくれたから。

後から考えると、俺は有子に甘えていたのかも知れない。

愛情の出し惜しみをしたつもりはなかった。俺なりに必死で真剣に愛したつもりだったのに。

俺の独りよがりだったのかと思うと、悲しかった。

俺の独り相撲だったのかと思うと、虚しかった。

有子の前では泣けなかった。俺は一人で泣いた。その後、大学の友人と飲みに行った。友人の前で泣く代わりに、バカ話をした。それから帰宅し、酔いが冷めてからまた少し泣いた。

それから仕事に没頭した。出会いは一度もなかったわけじゃないけど、慎重になっていた。

なんとなく俺は自分が欠陥人間なんじゃないかと思っていた。恋愛には向いていない。女の気持ちや感情の揺れや波は、特に理解できなかった。

俺は平穏を、静寂さを、秩序や安寧を求めた。

理解不能なものは恐かった。

第六話 弁当

昼休み。同僚達は皆外に出かけて、部屋に残ったのは俺だけになった。だけど、近くのコンビニに買い出しに行った連中はすぐ戻ってくる。だから、今の内に移動しよう。そう考えて、ピンク色の弁当袋を抱えて、外に出た。あまり人目につかないところで食べようと思い、怪しいことこの上ないが、非常階段へ回った。

非常階段の途中の踊り場で、手摺に寄りかかって、袋の中身を取り出した。

何処からかモーター音が聞こえる。エアコンの室外機かも知れない。

手っ取り早く食事をしてしまおう。そう思って、弁当箱を開いた。

「……………」

なんというかカラフルだった。

ご飯の上には、おおかでハートマークが描かれている。

タコウィンナーが何故か二体向かい合わせで、爪楊枝で連結されている。

薄い色の厚焼き玉子には中にシソとノリとジャコが入って巻かれている。

薄い色の大根の煮物、キンピラごぼう、ゴマをちらしたイワシの醤油煮に軽く酢を加えたもの。

それとリンゴの角切り。

「意外だ……」

和食だなんて思わなかった。しかも色が薄い事から、安い惣菜の詰め合わせではなさそうだった。

夕食の残り物を入れたのだとしても、何だか新鮮だった。

「……そういえば、大根の煮物やイワシなんか、最近食べたことなかったよな」

ポツリと呟く。

「しかしなんで、こんな風に刺すんだ？」

タコウィンナーのほぼ中央部に串刺しされた爪楊枝を抜きながら、不思議に思った。

なんというか、ドッキングというよりは、心中に見えると思う。

「待てよ、このまま食べれば良いのか？」

タコウィンナーを箸で摘むのはちよつと面倒だ。それよりは爪楊枝で刺して食べる方がずっと楽だ。

そう思い、また刺し直した。が、今度は一方が背中から抱きつくようになつてくうになり、思わずプツとふき出してしまった。

「……ったく、何だよ、これ……っ」

冷静に考えると、そんなにおかしな事でもなかった筈だが、何故かうけてしまった。

……疲れているのかも知れない。

「しかし、タコウィンナーに、ハートマークって小学生か？」

笑いながら、厚焼き玉子に手を付けて、その繊細な味と香りに、息を飲んだ。

「……………」

ぼんやりと食べかけの玉子焼きを、暫し見つめる。

「……ダシの香りと、シソとノリと、醤油……？」

こんなところでこんなものを食べるとは、思いも寄らなかった。本当に自己申告通り、彼女の手作りだとしたら、俺はかなり彼女を見くびっていたことになる。

「……………」

その後は無言で、静かに食べた。お袋の味とはまた違うそれは、かなり薄味だったが、その分ダシが濃厚で香りが良かった。また歯触り、舌触りが良い。

食べながら、何故か泣きそうな気分になった。

「……………」

何なんだ、と自問自答する。嬉しいというのとは違う。旨いことは旨い。それだったら、もっと旨いものを食べた事もある。それな

りに感動したが、これはそういうものじゃない。

どちらかと言えば、郷愁というか、懐かしさを、感じる。

ずっと探していたものにやっと出会えたような、そういう感覚。

「……感傷？ 久しぶりに有子のことを思い出したから……」

それも違う。

困惑した。食べ終えて、蓋を閉めながら、複雑なすっきりしない
気分を抱えて、眉間に皺寄せ、ため息をついた。

ため息をつきながら、今日は帰りにスパに寄って行こうと考えた。

第七話 副幹事

日本は温泉・銭湯などが世界一多い国ではないかと思う。全国各地至るところに大小様々な施設がある。

スパ、つまり天然温泉は、わざわざ山や郊外まで行かなくても、市街地にもある。天然や源泉にこだわるのは、つまりその効能を期待するからだ。

癒されたい。それは身体だけではなく、心も含めてだ。だから、いくら効能の素晴らしい天然温泉でも、不潔なところへは行きたくないし、内装も悪いよりは良い方がよい。

なるべく落ち着ける雰囲気きずなの所に行きたいと思い、同僚に相談すると、

「じゃあ、女性陣も何人か誘って行くか」と言われた。

正直言うと、一人で行きたかったのだが、なんとなく断り辛い雰囲気になってしまったので、仕方なく男女六人で行く事になった。当然、食事と酒付きである。しかも、言い出しっぺの一人という事にされてしまい、副幹事に任命されてしまったのは、大きな計算違いだ。

独身の男三人、女三人という組み合わせは、もしかしくても狙っているだろう。

「……高杉^{たかすぎ}、お前、彼女いたんじゃないのか？」

幹事役の同僚、企画担当の友人に尋ねると、

「それはそれ、これはこれ。だいたいな、これは彼女イナイ暦五年以上のお前のための企画なんだぞ」

「頼んでない」

有り難迷惑だ。

「そういうこと言うな。梶木^{かじき}もノリノリだし、受付のユキナちゃんだって喜んでるんだから」

「誰だ、それ」

受付なら知らない筈はないが。

ふかがわゆきな

「深川由貴奈ちゃんだよ。今年入社」

「あの内巻きロールの新人か」

「そ。可愛くて巨乳の」

「巨乳？ そんなに大きかったか？」

「いや、Dくらいだけど。だけどそれくらいありや十分だろ？ それともお前、オッパイ星人だっけ？」

「別に。あまりこだわりはない」

ただ、面倒臭いのと煩いのは苦手だ。

「良く見てるんだな」

「毎日見る子のチェックくらいするだろ？」

「顔は見るけど、それから下は別に。セクハラだとか何とか言われるのは面倒だ」

「……お前、渴れてるな」

そんな事言われたくない。

「別に渴れてるわけじゃない」

たぶん好みだったらチェックするだろうけど、そうじゃないから見ないだけだ。

「お前、トシのワリにふけてんだよ。ユキナちゃん、俺とお前が同期だなんて思わなかったって言ってたぞ？」

「……そんなに老けてるか？」

「見た目はそれほどじゃねーけど、言動がオッサン臭いだろ？」

「……………」

ちよつとショックだった。

「ま、俺が二十六歳くらいで、お前が三十歳らしいから、共にプラマイ二歳ずつ？ そんなたいした誤差じゃないけどな」

それはそうだが、なんとなく複雑な心境だ。頼もしく見られるとか、貫禄があると見られるのなら嬉しいが、老けていると言われるのは。おとなげないと言われるよりは、確実にマシだが。

「高杉は深川狙いなのか？」

「いや、ユキナちゃんは惜しいけど、お前に譲ってやるから、ガン行け」

「……………」

もしかして、始まる前から、既に決定事項なのだろうか。

「選択の余地はないのか？」

「来生^{きすぎ}ちゃん^{きすぎ}は梶木のお目当てだし、俺はユキナちゃんがダメなら、アキちゃん狙うから」

「なら、お前が深川でも良いんじゃないか？」

「彼女にバレると殺されるから、口が堅そうなアキちゃんの方が良い」

「……………」

ため息をついた。

「……嫌だと言っても拒否権はないんだろ？」

「贅沢言うな、井上。一番若くて胸が大きいユキナちゃんだぞ。嬉しくないのか」

「向こうにだって選ぶ権利はあるだろ？」

すると高杉はニヤリと笑った。

「安心しろ。幸運の女神はお前に微笑んでいる」

俺は深いため息をついた。

第八話 欠陥人間

憂鬱だ。

合コンなんて、いったい何年ぶりだろう。

酒を飲むのは嫌いじゃない。けど、それに女がつくのは微妙だ。

俺はどちらかと言うと口下手だ。女を口説くのは苦手だし、一言二言話しただけで、恐いと泣かれた事もある。

どうやら俺は、特に親しくない異性と話をする時、緊張のあまりより無表情に、より抑制的になる傾向があつて、それが相手を怖がらせる要因になるらしい。

別に堅物というわけでも、清廉潔癖というわけでもない。

ただ、女と上手く付き合えた経験が少ないから、苦手なだけだ。

別に好きな女がいるわけでも、特定の恋人がいるわけでもないから、遊びで付き合うくらいなら悪くない。相手がいればだが。

だけど、まともに女と付き合える自信は正直ない。

自分の事で精一杯で、できる事なら余分な時間は、自分の勉強に充てたいし、仕事もしたい。

この世にデートも気遣いも凝ったプレゼントも必要ないけど、抱かせてくれるという女がいたら付き合っても良い。ただし、愚痴や文句は聞きたくないし、安眠・休息・プライベートの侵害・妨害はされたくない。

勿論そんな都合の良い女はいないし、だいたいがそれじゃ恋人じゃない。

何か問題があるとしたら、恋をしてないのが問題だろう。

恋愛感情なんかなくても女を抱く事は可能だが、ビジネスじゃなければ、たいていは色々面倒な事になる。

好きでもない女のための苦労や面倒なんて正直ごめんだ。

『覚は私のこと、そんなに好きじゃなかったでしょ？』

そうじゃない、と反論できなかったのは、本当にショックだった

からか、それとも実は凶星だったからだろうか。時間が経つ程に、自信がなくなる。

俺が、有子を愛していなかったとすれば、俺はただの一度も女を愛した事のない薄情な男なんじゃないか。俺は本当は誰も愛せない人間なんじゃないかと思うと、とても恐くなる。欠陥人間としての烙印を押されたみたいで。

深く考えない方が良い。あまり考え過ぎない方が良い。

だいたい俺はしつこ過ぎる。何年前のことだと思ってるんだ。きつと有子は忘れている。

別に有子に未練があるわけじゃない。有子を思い出しても、少しも苦しくはない。過去のことだ。

気になっているのは、あの言葉だけ。鮮明に覚えているのは、あの時の言葉と口調だけだ。他にはない。

たぶん俺は執念深い質なんだろう。だけど、有子には何の想いも感じていない。好きでも嫌いでもない。有子の顔は、思い出せそうで、もう思い出せない。俺は薄情な男だ。

忙しい日々にまぎれて、忘れられないと思った記憶ですら、簡単に忘れる。

俺が恐いのは、たぶん自分自身だ。

第九話 香り

結局スパは、高杉が「折角行くのに、男女別々じゃつまらないし意味がない」と言って水着で入れるところに行く事になり、どうせだからゆっくり出来る週末、明後日にしようという事になった。

こうなると、どう考えても高杉に相談した自分が悪かったとしか思えない。

今日の帰りは、昨日より幾分早めの電車に乗れた。椅子に腰掛け、ぼんやり考える。

弁当箱。やはり洗って返すのが筋だろうか。だとしたら、今日はコンビニにはよらずに、明日にした方が良いのか。

だけどあの中島という女は色々煩そうだ。弁当は旨かったし、弁当分の礼を言いたい気分ではあったが、なんとなく顔を合わせたくなかった。

家から一番近いところだし、わりと気に入っていたのだが、煩く絡まれるのは面倒だし、どうしたものかと考える。

「……別に深く考える事でもないか」

どうせ通りすがりだ。弁当箱を返したら、それで終わる関係だ。気にする事なんか何もない。

やはり洗わずに今日の内に返してしまおう。誰か他人に言付ければ良いだろう。あと、あの店にはもう行かない。それで良い。

「……………」

問題ない筈だ。だけど、ふと、昼休みのことを思い出し、反芻した。

考えてみれば、ここ最近あまり笑っていなかった。今思い返すと、何故あんなに笑ったのか、判らない。

厚焼き玉子は、カツオダシ、シソ、ノリ、ジャコ、醤油の香りが程良く絡み合い、口の中で広がった。

匂いは、鼻孔からのみ感知できるのだと思っていた。口の中から、

咀嚼する毎に広がる香りは、新鮮だった。

ただ、弁当箱に詰められていたそれは、幾分匂いが薄まり、互いに僅かずつ混じり合っていた。

だが、咀嚼によって、それ自身の匂いが強まり、味や食感だけでなく香りも味わう事ができた。

どの料理にも共通して使われていたのは醤油だ。ご飯の上のおかかですら、同じ香りがした。という事はオカカも手作りだという事だ。

野菜を、イワシをあんなに味わって食べたのは久しぶりだ。

おいしかったせいもある。だけど、咀嚼も楽しかった。味以上に、食感と香りが良かったから、それを楽しんだ。

自炊をしようか、と考える。食事を作るのは面倒だったし、後片付けは更に面倒だった。

一応料理を全くしないわけではない。一人暮らしを始めた頃は、ちゃんと作って食べていた。自炊すると、外食するより安く済ませられるからだったが。

電車を降りて、改札を抜ける。意識しなくても、身体は毎日の習慣を記憶していて、自動的に動く。

帰りにスーパーで買い物をして、コンビニ経由で帰ろう。

おそらく数年間、ほとんど使っていない調味料の大半はダメになっているだろう。ここ最近開けてみた事もない。

考えたら憂鬱になった。やはり今度にしよう。休みの日で良い。

自炊と言っても然程上手くはないが、味噌汁と玉子焼きくらいなら作れる。

出来合いのもので済ます生活は、既に数年続いていた。

手作りの料理を食べたのは、幾度か、実家に帰った時だけだ。

人の優しさに飢えていたのかも知れない。あるいは、他人の温度、接触到。

拾った猫と同じようなものだ。エサを与えられると反応する。だけど、だからといってなついていないわけじゃない。

コンビニ店に入った。中にいる店員は大学生風の男だった。

適当に、食欲を満たすための食べ物を選ぶ。なんとなく野菜の煮物が食べたくなって、おでんを少し注文する事にした。

どの弁当も、あまり食欲をそそられなかった。ほとんどどれも一度は食べた事があるようなもののばかりで、目新しさがなかったからかも知れない。

おにぎりと、惣菜を選び、おでんをいくつか注文した。

それから弁当袋を取り出した。

「あの、すみません。こちらのバイトの中島さんに、返したいんですが」

「中島？ なかじまさんとし あ、中島理子ですか」

そう言って店員は弁当袋に視線を落とす。

「彼女の弁当、本当旨いですよね」

店員が笑顔を浮かべて言った。ドキリとした。

「けど、なかなか頼んでも作ってくれないんスよね
え？」

「作って欲しいなら報酬払えって。さすがに金払ってまで作って貰おうとは思いませんし」

「……………」

「ところでお客さん、もしかして彼氏ですか？」

「……いや、通りすがりの赤の他人だ」

そう答えると、店員は妙な顔つきになった。

「……無駄口過ぎでしたね。すみません」
頭を下げられた。

「会計は？」

「あ、す、すみません！」

店員は手早くレジを打ち、

「九百二十五円になります」

千円札で支払い、釣りを受け取った。

商品を受け取り、店を出た。

足早に自宅へ向かう。その途中で、思わず足を止めた。

……嘘だろうか？

路上に座り込む女と、それを取り囲むように立つ二人の男の姿が見えた。

第十話 災厄

見なかったふりをしよう。関わり合いになりたくない。もしかしくなくともトラブルの臭いがプンプンする。

男二人が女にちよっかいを出し、女が何やら暴言を吐いている。

「はぁ？ 知らないわよ。寝言は寝て言いなさいよ、バアカ。アハハハッ」

こんな具合だ。背を向けようとした時、路上に座り込んでいる女と、目が合ってしまった。

「あー、井上さんだ」

……最悪。女に絡んでいた男が、こちらを振り返る。

「やつほー、元気？ 今日もまた輪をかけて胃腸が悪そうな顔だけど」

誰のせいだと思ってるんだ。

「何だよ、テメエ。この女のツレか？」

「ふざけんじゃねエぞ、コラ」

若さが暴走しそうなすこぶる生きの良い若者だ。おそらくは十代もしくは二十代前半。多少の無茶がしたい、元気が有り余っている年頃だ。

もっとも俺は、同じ年頃の頃は真面目に勉強しつつ、恋人や友人との付き合いを平和的に楽しんでいたが。

やはりここで俺が、この女は通りすがりの赤の他人で、俺は無関係だと言っても、きっと納得してもらえないのだろう。……疫病神だ。

「警察を呼ぶか？」

ため息をつきながら、俺は言った。

「その方が良ければ、そうするが」

「……なっ……！」

「テメエ、なめてんじゃねエぞ」

彼らより、女の方が質が悪い。路上で泥酔して人に迷惑かけるなんて、論外だ。

俺は携帯電話を取り出し、110番をコールする。

「なっ、本当にかけてやがる！」

「くそ、無表情でいったい何考えてんだ、こいつ！」

男達が駆け去って行く。

「すみません。路上に泥酔者がいるんですが、こちらでよろしかったでしょうか？」

「はえ？」

女はキョトンとした。

「正確な歳は判りませんが、おそらく十代後半から二十代前半、女性です」

「……それって私のこと？」

女は不思議そうに俺を見た。

「ええ。通行人に迷惑をかけているようなので。場所は……」

「えええええっ!？」

甲高い悲鳴に、思わず携帯を落としそうになった。

「ヒドイよ、ヒドイよっ! 私、通行人に迷惑かけてないよっ!!」

ただ、道の端っこに座ってお酒飲んで楽しんでるだけじゃん!!」

……その何処が迷惑じゃないと言うんだ。

「路上は座り込むところでも、酒を飲むところでもない。酒が飲みたければ、居酒屋でもバーでも何処でも、酒を出す店に行って飲め。他人の迷惑だ。だいたい昨日といい今日といい、なんでこんなところにいるんだ」

「だってここ、家の前だもん」

女は真顔で言った。

「は？」

思わず顔をしかめてしまった。

「だからと言って、私有地じゃないだろう。ここは公共の道路だ。お前のものじゃない。皆のものだ。判ったら居座るな。移動しろ」

そう言うと、女が飛び掛かって来た。

「な……っ!？」

俺の携帯電話を奪うと、電源をオフにする。

「何して……っ!」

更にそれを放り投げた。空を舞うそれを慌てて掴もうとするが、あとちよつとのところが足りずに指先をかすめて、更に空高く舞い――

「……嘘だろ？」

嫌な音を立てて、落下した。

恐る恐るそれに近付き、拾い上げて、電源を入れてみたが、反応しない。

「……最悪」

やっぱり疫病神、いや、災厄だ。

「なんて事するんだ。仕事の連絡にも使ってるのに……!」

「え？ 怒ってる？」

女は驚いた顔で俺を見る。

「普通は怒るだろう!! なんて事するんだ!!」

「えー? だって通報は困るし」

「困るしじゃないだろ!! 迷惑なんだよ!!」

「ええと、余分なお金はないんだけど……働いて返すつので、許して貰える?」

小動物のような瞳で俺を見上げ、首を傾げて言う女に、ものすごく腹が立った。

「……ふざけるな」

「え、ダメ？」

そんなの。……こんな事されて、笑って許せる男がいたら、見てみたい。

「何でもするから。お願い。警察だけは許して」
ものすごく、意地悪な気分になった。

「何でも? 本当に何でも出来るのか?」

俺の言葉に、女はコクコクと頷いた。

「……じゃあ、覚悟しろよ」

「え？」

女はきよんとした。

第十話 災厄（後書き）

意味深な引きですが、R15でもR18でもないので、あまり期待はしないでください。
すみません。

第十一話 バカ

「この際だから、言ってる。酒は飲んでも呑まれるな。節度を持つて飲め」

「セツドって？」

女はキョトンと首を傾げた。

バカだ。こんなバカは見たことがない。

「……簡単に言うと、度を超えるなという事だ。自分の限界・限度を知り、周りを知り、道徳・礼節・倫理を知り、それを意識して自分の定量を決めて守れ。それがしいては、世のため人のため自分のためになる」

「難しくても良く判らないよ。もっと簡単に言ってる」

……救い難いバカだ。何故判らないんだ。どうしろというんだ、こんなバカ。

ため息をついた。だが、こんな女を放置したら、いつかその内三面記事で名前を見かける事になりそうだ。

「飲みすぎるな。あと飲む時は場所や状況を考えろ。人の迷惑になるような事をするな」

「だったら最初からそう言えば良いじゃない」

「……………」

だんだん殴りたくなって来た。相手は一応女だ。落ち着いて理性を保て。

「とにかく台所、特に流し台回りを掃除してくれ。ゴミ袋はその二段目の引き出し。流し台の下は、たぶんほとんどゴミしか入っていないと思う。ちなみにマスクは置いてない。雑巾は適当なタオルを使ってくれ」

女はパタンパタンと棚の戸を開け閉めしてから

「流し台の下の棚、何か殺人的な異臭がするんだけど」

と、泣きそうな顔で言った。

「携帯ショップに行つて来るから、その間に片付けて。それまで鍵と携帯と財布と保険証と各種カードは預かっておく」

「……なんでこんなカオスワールドが展開されてるの、この台所。死体が混じつても判らないよ」

失礼な。そこまでは酷くない。

一応盗まれたら困るような貴重品は持って出かける事にする。

「キッチン回りを掃除するだけで良い。何でもすると言ったのは嘘なのか？」

「……ネズミとか死んでそう。私、子供の頃にネズミに噛まれて超ダメなのに」

俺は無視して背を向けた。とにかく急がないと、今日中に代わりを手に入れておきたい。

駆け込むように店に飛び込んで、適当なものを契約して受け取った。案の定というかデータは読み込めなかった。別に消えて困るようなものはなかったが、またアドレス帳を登録し直すのは面倒だ。今度は外部メディアに保存できるタイプの機種にした。

前の機種の契約期間が長かったので、思っていたより機種変更を安く済ませる事ができて、少しほっとした。結局全ての作業に二時間近くかかってしまった。

会社関係は明日出勤すれば判るが、高校・大学時代の友人のメールアドレスや番号は、ほぼ全滅だ。元々あまりマメじゃない方だから期待薄だが、向こうから連絡あった時に登録するしかない。

日頃の行いが悪いからな、とため息をついた。

本来ならば警察に突き出してやっても良いところだが、とりあえず掃除だけで許してやることにした。

それにしても、あれで二十三歳だとは信じ難い。いったい親はどう教育したのだろう。俺が親なら、決して一人暮らしなどさせない。あんな性格では、誰に何をされたって文句は言えないと思う。

帰宅すると、女は泣きながらゴミ袋にカビた元ジャガイモや何か――原形を留めていないため不明――を詰めている。

なんで本気で泣いてるんだ？ 思わず驚き固まってしまった。

「あ、お帰りなさい、井上さん」

ポロポロと涙を溢しながら、女が言う。

俺は呆然と見つめてしまう。

「井上さん？」

「……なんで」

「え？」

女は手を止めてキョトンとした。

「なんで泣いてるんだ」

「え？ あ、目と鼻と喉が痛いからかな」

「だったらきれいなタオルで口と鼻を覆うとか何かしろよ！」

「え、あ、う？ 怒ってる？」

驚いた顔で俺を見つめる女に苛々しながら、ティッシュボックスとタオルを渡す。

女はティッシュで鼻を噛み、タオルで顔を拭いた。

「あのね、除菌のできる洗剤か何かがあると便利なんだけど」

「漂白剤や洗剤じゃ駄目なのか？」

「カビがすごい。カビは除菌しないと無理だから」

「買って来ないと無い」

「じゃあ、買って来る」

女が立ち上がる。

「財布もないのにどうやって？」

「あ、そうだ。お金ください、洗剤代」

呆れてしまった。

「別に良い」

「え、でも掃除出来ないし」

「今、何時だと思ってるんだ。今日はもう良い。明日はバイト？」

「そうだけど」

「じゃあ、もう寝ろ」

「何処で？」

ハッと硬直した。

「……まさかまだ自宅で眠れない状態なのか？」

「今日、天井と床と壁を剥がし終えて中身が剥き出しになったところ」

「家財はどうしてる？」

「貸し倉庫に預けてある。服は数日分だけバイト先のロッカーに置いてある」

「……風呂は？」

「入ってない」

頭が痛くなった。

「……どうしてそういう事を人に相談しないんだ」

「え？ 相談？」

「友達とか。バイト先とか。説明してあるのか、そういうこと」

「だって迷惑かけられないし」

見知らぬ赤の他人にはかけても良いのか。こういう感覚なんだ、この女は。

「言えば良いだろう。困ってるなら」

「別に困ってないけど？」

嘘をつくな。

「昨夜、俺に泊めてくれと泣き付いてきたくせに。見知らぬ赤の他人の俺に言うくらいなら、親しい信頼できる人間に言った方がマシだろう？」

「え。でも、迷惑かけて嫌がられたくないし」

「……待てよ。俺に迷惑かけるのは問題ないのか？」

「え？ だって、記憶ないし」

「……………」

かなり本気で腹が立ってきた。

「現在進行形で、迷惑かけているという自覚はないらしいな」

「……え？」

俺はキョトンとしている女の腕を引いて、フローリングの床に押

し倒した。

「え、何、痛いよ。どうしたの？」

本気で判ってない目だ。嗜虐心が煽られる。

「……例えば、見知らぬ男の部屋で、二人きりになったとしたら、どうなるかと考えないのか？」

「え？　だって、井上さん、私のこと好みじゃないって……」

本当にバカだ。

「だから、それを信じるのか？　相手がどういう人間か知りもしないで？」

無防備すぎる。

「それでよく今まで無事だったな。それとも、何度同じ目に遭っても懲りなかったのか？」

そう言って、頬をやりわり撫でてやると、初めて怯えの色が表れた。

「えっ……やっ……！」

乱暴に両腕を掴んで、頭の上で床に押し付ける。

それから乱れて顔にかかった茶色の柔らかな髪を払って床に落とし、人差し指と中指の腹でゆっくり額から目尻、頬、顎を這わせ、それから更にゆっくり円を描くように唇の回りを撫で回してから、怯える女の唇に触れた。

「……どうして欲しい？」

意地悪な口調で尋ねてやる。どうせ返事はないか『やめてください』辺りだろうと思っていたが、

「……井上さんって実はドS？　かなりヤバイ人？」

という素っ頓狂な答えが返ってきて、かなり萎えた。……計算なしの天然だったら、恐ろしい才能だが、わざとならばもっと恐い。

「……………」

俺は無言で女を見つめた。

「やっぱりドSなんだ、そのムシケラを見るような冷たい目つき。人は見かけによらないっていうけど、本当だね。初めて見たよ、生

ドS」

「……………」

首を絞めてやりたい気分だが、それじゃ本当に犯罪だ。しかし、何故そんな台詞を明るくあっけらかんと言えるんだ、この女。頭の中の構造がどうなっているか、かなり本気で知りたい。

「キチクなんですか、井上さん」

「……本当に鬼畜でサディストな男にそういう事言ったら、殺されても文句は言えないぞ」

感情を押し殺してそう言っでやる。

「え？ 冗談ですか？」

「……………」

冗談でこんな危ないことする男がいるなら、見てみたい。そう思ったが、無言で女を解放してやる。

「……あゝ、びっくりした。冗談キツイよ、井上さん」

冗談きついのは、お前の方だ。こういう性格・神経してるんだ。

第十一話 バカ（後書き）

期待した方すみません。

第十二話 親切

「素直に事情話して友達のところへ行け」

そう言くと、女は目を丸くした。

「え？」

「本当の友達なら、嫌がるより先に心配してくれるだろう？」

「え、それを伝えるために、あんなことしたの？」

「……………」

なんでこんなバカなんだ。

「……俺の部屋に泊まったりしたら、どうなるか判らないぞ。恋人いない暦五年だからな」

「……モテないの？」

普通、思っても、口に出して言ったりはしないんじゃないかと思うんだが。

俺は怒るより、呆れてしまった。

「……そういう事は思っても言わない方が良いぞ。人によっては傷付いたり、逆上したりするからな」

「そうなの？」

「……………」

なんとなく、判ってきた。こいつはバカだ。掛け値なしの、心底救い難い、髪の前から骨の髄までバカだ。何も考えていない。

ため息をついた。バカに説明するのは面倒臭い。かと言って放置すると、俺だけじゃなく、このバカの周囲の人間が迷惑し苦労する羽目になる。

とんでもない貧乏くじを、災厄を引き当てた。

とんでもないバカに遭遇してしまった。

どうせ何を言っても通じないバカで、通りすがりの赤の他人なんだから、見捨てて放置すれば良い。

なのに、保護者気分になっているのは、どういうわけだ。

俺はそんなに親切でも博愛主義でもなかった筈だ。

「……………」

ため息つきながら、女を見つめた。

「……中島理子だったか？」

「あれ、下の名前教えたっけ？」

「バイト先で聞いた。それに保険証にも書いてある」

「あ、そうなんだ」

女はあっさりあっけなく頷き、納得する。

「携帯とか財布とか返してやるから、今すぐ友達に連絡しろ」

「今すぐ？　だってもう十二時になっちゃうよ？」

「その時間にかけても許してくれそうな友達にかけてみる」

「……井上さんて、お節介」

本気で絞め殺したくなってきた。まずい。

「俺はシャワー浴びて来るから、その間に用事を済ませろ。帰ってきたら、鍵かけずに帰って良い」

「なんでそんなに親切にしてくれるの？」

別に親切なんかじゃない。

「見ていて腹が立つからだ」

「ふうん、そうなんだ」

何故この女は腹が立つと言われてこんな反応するんだ？

普通は泣きそうになったり、怒ったりすると思うんだが。

「やっぱり良い人だね、井上さん」

こんなバカ見たことない。

「お前、人に騙されやすいだろ？」

「え？　あ、うん、どっちゃって言うかわりとそうかも」

わりとじゃないだろう。かなりの間違いじゃないのか。

「どうしても困った時は、友達か警察に助けを求めるよう心がけろ」

「井上さんは？」

「俺は面倒事や厄介事はごめんだ。関わりたくない。お前とも」

そう言うと、中島理子は目をパチクリさせて、俺を見た。

「……井上さんて」

何だ？

「照れ屋さん？」

真顔で尋ねられて、脱力した。

「……シャワー浴びて来る」

そう告げて、風呂場へと向かった。

第十三話 キリギリス

シャワー浴びている間に帰っていてくれると良いと思いながら部屋に戻ると、疫病神はまだそこにいて、正座していた。

「何だ？」

「この度は、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫び申し上げます」

そう言って、床に手をつき、深々と頭を下げられる。

「……………」

理解不能。謝られているのだという事は判る。たぶん丁重に謝罪されているのだが、何故か悪い冗談にしか見えない。

「後日、改めてお詫び申し上げますが、今はちよつと無理、ってかぶっちゃけ金も物資もないので、大変申し訳ありませんが、今日はこれで失礼させていただきます」

「……一部文脈が乱れてるぞ」

そう言くと、女はうなだれ、肩を落とした。

「で、行く先は決まったのか？」

尋ねてやると、女は顔を上げて、

「はい。友達のところへ厄介になる事になりました。あと酔いもかなり冷めてきました」

「……成程、それでか。」

「携帯、ごめんなさい。いくらかかりましたか？」

「金は別に良い」

どうせ一万ちよつとだったし。たぶんこの女はろくに金なんか持っていないだろう。

「じゃ、何をしたらお詫びになりますか」

「何もするな」

できれば目の前には現れないでくれ。

「……その言い方はちよつとキツイんじゃないかな」

女は困った顔になる。

「そうか？　だけど昨日と今日、俺がお前に被った迷惑を考慮すれば、わりと妥当だと思うぞ？」

「……弁当じゃお詫びにならなかったかな？」

自信なさそうに言って、女はしょんぼりした。

「特に母さんの作ったおかかは最高だと思うんだけど」

「お前の母親の手作りなのか？」

「おかかと梅干しと味噌はまだ上手く作れないから。実家での見よう見まねですけど、イマイチで」

「……それ以外は手作り？」

「そう。ジャコ入りの玉子焼きはスパニッシュオムレツの次にお気に入り」

「スパニッシュオムレツ？」

「具だくさんのオムレツのこと。破裂する限界まで入れるのが好き。たまに入れすぎて巨大になって食べきれなくて困るけど」

「ダシと醤油の香りが良かった」

そう言うのと、女は明るい顔になった。

「あれ、いつも実家から宅配で送って貰うの。そろそろ来る筈なんだけど」

「だから、家の前の道路にいたのか？」

「だって水浸しや剥き出しの部屋の中にいたら、凹むし何か殺伐とした気分になるんだもん。酒でも飲まないと、やってられないよ。工事修理費はタダだけど、貸し倉庫代は出ないもん。狙ってたワンプイを買おうと思ってたのに、足りなくなっちゃった」

「いくら足りないんだ？」

「三千円ほど。悔しいから一万九千円分、全部飲んじゃおうと思っ
て」

「……バカだろう」

「うん。本当迷惑かけてごめんなさい」

「貯金しておいたらどうだ？　何かあった時のために」

「そういう堅実で計画的な生き方できそうにないな。お金はあったらあった分、使っちゃう。私、ギリギリスだから」

「ギリギリス？」

「アリとギリギリスって話あるでしょ。あのギリギリス。遊ぶだけ遊んで全力で夏を楽しんで、冬が来たら死ぬの。それって最高の人生でしょ。そこまでやれたら本望じゃん。だから力いっぱい遊ぶの。明日死んでも後悔しないように。いつ来るか判らない冬のために我慢して耐え忍ぶなんて無理。死ぬ時は何も残さずあっさり死ねたら最高だよ。すっごく良いよ、ギリギリス人生」

目をキラキラと輝かせて、女は言った。

「……………」

何と言うべきか。そこまでして遊びたいという気持ちは、判るようで判らない。

俺は明日に死んでも良いと思った事はないし、そんな風に遊ぼうと思った事もない。

「遊ぶって例えばどんな風に？」

「ショッピングとか、食べ歩きとか、カラオケとか、飲みに行ったり、踊りに行ったり、1on1したり、ゲーセン行ったり、バッテリーセンター行ったり、ボーリングとかビリヤードとかダーツとかしたり。スキーとかスケートとかダイビングも好き。ヨットセーリングも良いよ。エステとかマッサージも好きだし、岩盤浴とかサウナとかも好き。でも占いとかはどうでも良い」

「……それって楽しいか？」

「楽しいよ。友達と一緒にだともっと楽しい」

にこにこ笑って楽しそうに言う。

俺には良く理解できなかった。だけど、本人が楽しそうで、嬉しそうだったから、それは間違いないだろうと思う。

「遊ぶためにバイトしてるのか？」

「遊びと生活。バイトも楽しんでるけど、やっぱり遊んでる時が一番最高！」

たぶん、親なら将来を心配するところなんだろうが。まだ若いし、先の事なんか考える気にもならないんだろう。本人がそれで良いなら、口出しする事でもないんじゃないかと思う。

あえて言うなら、こいつダメ人間の部類だな、と思う。

職業はフリーターというよりは遊び人。そう言ってやったら、こいつならかえって喜びそうな気がする。

変な女だ。普通に暮らしていたら、絶対遭遇しないタイプの人間だ。

心底バカだと思う。だけど、ちょっぴり羨ましい。

「友達の家は近いのか？」

「ううん。だけど、車で迎えに来てくれるって」

「そうか」

それなら安心だ。

「もう無理とか無茶はするなよ」

「へ？ 何それ。そんな事してないよ？」

女はキョトンとした。……どうしよう。また首を絞めたくなくなってきた。

第十四話 アリの人生

アリとキリギリスどちらかと聞かれれば、たぶん俺はアリだろう。冬になったら死んでも良いとはとても思えない。

石橋を叩いて渡りたいし、見えない未来の不安のために備えて構えて生きていたい。

だから決してキリギリスになりたいとは思わない。

それでも羨ましいと思うのは、自分が決してそうない事を知っているからだ。方向性はともかくそこまでしてやりたいと思える事がないからだ。

やっている内容事態はどうでも良いし、興味ない。

仕事は好きだし、誇りもある。仕事内容によっては満足感や充足、カタルシス、達成感も十分得られる。

責任も義務も軋轢もない世界は羨ましい。だが、俺は遊んで暮らしたいとは思えない。それはかえって苦痛だ。

俺は仕事や勉強以外にはあまり取り柄がない方だから。

スキューバダイビングやヨットセーリングは勿論、ビリヤードやダーツなんてやった事がない。

普通の生活していたら、ヨットなんて生で見る経験もない。

どうしたらそんなに色々やる暇があるのか不思議に思うが、遊ぶために生きているのなら、そういうものなんだろう。

俺には想像もできない世界だ。

中島理子とメアド交換して別れた。向こうからせがまれたから教えたのだが。

一つだけ質問しても良いと言われたなら、聞いてみたい事がある。何故、そんなに遊びたいんだ？

そこに何か得られるものはあるのか？

それによって、お前は何か満たされたり、達成感やカタルシスを
得る事ができるのか？

それは、それ以外の全てに優先される程に、重要な事なのか？
しまった。これじゃ一つじゃないな。

聞きたいのは、遊びという要素は、人生の中心に据えられるもの
なのかどうか、だ。

それ以外の全てに代えられぬ程に重要なのかどうか。

俺には理解できない感覚だから。

そうになりたいとは思わないが、知らない感覚だから興味がある。

知りたいと思う。

理解したいとは思わないが。

世代の違いなのか、性格・感性の違いなのか。後者だと思いたい。
変な女だけど、迷惑被らなければ、目の前でうろつかねければ
嫌いじゃないと思う。

会って嬉しいタイプの人間じゃないけど、俺に無関係なところで
楽しそうにしている分には、一人くらいなら知り合いにああいうの
がいても良いかもしれない。

迷惑かけられないならという注釈付きで。

見えていて苛々するから、そばにはいて欲しくない。

だから、赤の他人あるいは、顔見知りの距離でいたい。

確実に振り回されそうだから、それ以上の関係にはなりたくない。
まともに相手なんかしたら、胃が痛くなるのは確実だ。

俺は静かで平穏な、安定したアリの人生を送りたい。

少なくとも、騒がしく人迷惑なキリギリスに振り回されて、平穏
な生活を乱されたくはない。

第十四話 アリの人生（後書き）

暫く更新停滞して、他の小説を書きます。
すみません。

第十五話 深川由貴奈

「おはようございます、井上さん」

出勤途中、駅の改札を抜けたところで声をかけられた。

そこにいたのは、小柄ながらスタイルの良い、内巻き髪の完璧メイクの女。同じ会社の受付嬢、深川由貴奈だった。

「……ああ、おはよう」

顔が強張り声が自然と低くなってしまふ。我ながら情けない。

「同じ電車だったんですね」

深川は嬉しそうに言った。

そうだったのか。全然気付かなかった。

「いつもこの時間に出勤するんですか？」

「……大抵は」

歩いてる途中、深川の胸が布越しの右肘に軽く当たった。思わずどきりとして、心臓が跳ね上がる。顔はますます強張った。

距離が近すぎる。離れようとしたら、細い腕がするりと滑るように、右腕に絡みついてきた。思わず深川を振り返った。

マスカラとアイライナーに縁取られた黒くて大きな潤んだ瞳が、俺を真っ直ぐに見上げてくる。

「明日、楽しみですね、井上さん」

もしかして。

目をそらせずに、彼女を見つめて、ふと思った。

良く判らないけど、俺は彼女に好意を持たれているのか。それとも単にからかわれているだけだろうか。もしかして彼女は、高杉から俺がもう五年以上女と付き合っていない事を聞いたのだろうか。

腕に、彼女の柔らかな胸が当たっている。歩く度に僅かに揺れて、離れたり触れたりする。こんなの無視はできない。

「深川」

「なんですか？」

「……腕」

胸が当たってる、と言ってもこの場合はセクハラにはならないよな、と思う。

すると、ぎゅうっと深川が俺の腕にしがみついてきた。当然胸も潰されんばかりに押し付けられ、ぴったり密着する。

「嫌ですか？」

きらきらした目つきで、深川が見上げてくる。

「人に見られるよ」

それでも良いのか、と言外に含めて。視線を深川の顔、白い首筋、スーツの隙間の鎖骨、胸元に這わして。白いふくらみが作る見事な谷間から、ゆっくり目をそらして、深川の顔を見ると、妖しげに微笑んでいた。

「いつもこういう事をしているのか？」

「井上さんにだけですよ」

深川が甘い声で囁くように言う。学生時代の俺なら、鵜呑みにして胸を躍らせていたかもしれない。深川は好みではないが美人だ。だけど俺は、無条件に相手の言葉を信じられるほどウブではなかったし、ひねくれていた。

「本当に？」

「嘘なんか言いません」

「からかってるんじゃないか？」

「違います」

深川は媚びるように拗ねた顔で俺を見上げる。

その顔は可愛いと思う。それなりにそそられる。だけど、のめり込めない。ブレーキがかかってしまう。

「どうして俺なんだ」

本当は俺じゃなくてもかまわないんじゃないか。誰でも良いんじゃないか。

「井上さんは、ちゃんと顔を見て挨拶してくれるじゃないですか。皆に平等に。真面目な人なんだなって、ずっと思ってた」

それってどうでも良いってことだろ。興味ないからだ。薄情な人間だからだ。

「落ち着いてるから、結婚してるのかと思ってましたけど、独身だって聞いたから」

だから？

「ダメですか？ 私」

「俺のこと良く知らないだろう？」

「知らないですけど……知りたいです。教えてください」

真っ直ぐな視線が眩しい。何か必死にしがみつこうとしているような瞳で、情欲に揺らめく表情で見つめられれば、心が揺れる。

だけど、色欲と恋情の区別はつくのか？

人の心や感情に、色も形もない。それは確かにあると感じられるのに、きちんと認識して比較する事ができない。

若さは羨ましい。目の前にあるものを、疑うことなく信じる事ができる。

失敗の不安に怯えて二の足を踏み続けるのは正直情けない。酒の力を借りて理性を失えば、簡単にその場の雰囲気・状況に流され、差し出された手を躊躇いなく取る事ができる。

だけど、素面の俺は、生身の俺は、自信がない。

「俺は君を好きじゃないけど良いの？」

普通は断るよな。

「……私のこと、知ってください」

深川は言った。

「私が井上さんを知らないのと同じくらい、井上さんも私を知らないでしょう？ だから、私をもっと知ってください」

「付き合うとか、そういうの無しで？」

「はい。お願いします」

ゾクリときた。

「俺を好きなの？」

調子に乗ってるかもしれない。

「……はい」

例え嘘だとしても嬉しい。告白なんてされたのは、たぶん生まれて初めてだ。

「どこが良いの」

それは純粋な興味。

「真面目でストイックそうなところとか、清潔そうで、落ち着いていて、クールで頭が良さそうなところとか、誠実そうなところ」

物は言い様、という言葉を出す。

「根暗で怖そうとか思わないんだ？」

「思いません。……ただ、話してみて思ったんですけど、井上さん、思ったより気さくで色気があって素敵です」

気さく？ 色気？ 素敵？ 単に、欲情しているだけかもしれないとは、思ってもみないのか。

「俺のことなんか知ってもがっかりするだけだよ。時間の無駄かもしれない」

「そんなこと言わないでください！」

深川は真っ直ぐな瞳で、激しい口調で言った。

「井上さんは素敵な人です。私にはそう見えます」
何故そう思えるんだろう。

そんなふうに思い込めるんだ？

俺は、恋愛できる自信なんて、人を許容する余裕なんてない。

「金曜日の晩、楽しみにしていますから。あの……」
声が震えている。

「ごめん」

「え？」

驚いたように深川が俺を見る。

「怖がらせた？」

そう尋ねると、深川は一瞬目をみはり、フルフルと首を振った。
「違います。あの、緊張して」

照れた顔で言う。それが可愛く見えて、動揺した。

「一緒に、歩いて良いですか、会社まで」

もうとつくにそうしてるじゃないかと思いつつ、

「うん」

と言った。何だか気恥ずかしかった。青春時代が戻ってきたみたいで。

なんなんだ、と思う。やっぱり飢えてて淋しかったのか？

誰でも良いのは、俺の方だ。簡単に単純で、どうしようもなく、無節操だ。

俺は誰にも恋していない。また言われてしまうかも知れない。

『本当は好きじゃないのよ』

だけど好きだと思うよりも、好きだと思われる方が嬉しい。からかわれてるだけだとしても。

理屈で考えない方が良いな、と思う。たぶん俺は疲れている。心のどこか、何かが病んでいる。

流されてしまった方が楽だ。

こんな俺に、真面目とか誠実なんて言葉は似合わない。申し訳ないと思っていない。

たぶん、俺はまた振られる。愛想を尽かされる。それでも良いと、少し投げ遣りな気分と思う。

少々長く、引きずり過ぎた。

もっと早く諦めてしまえば良かったのに。

「深川」

「はい」

「付き合っても良いよ」

「会社までですか？」

「そうじゃなくて」

「え？」

深川の顔が、真っ赤になる。

「それって、もしかして」

「うん」

俺は頷く。

「その方が良く判るだろう？ 嫌だったら別れれば良い」

「……どうしてそういう事を言うんですか」

「嫌？」

「嫌じゃないです。ただ、付き合う前から別れるなんて言わないでください」

「ごめん」

赤い顔で深川は俺を見つめる。確かに可愛い。悪い気はしない。そっと髪を撫でた。さらりとした、ツヤのあるアッシュブラウンの髪。香水か何かの香りが漂ってきて、不意に身体の奥が痺れるように震えた。

「井上さん？」

グロスの塗られた小さな赤い唇が、小さく囁く。

抱きしめたい衝動に駆られて、視線を僅かにそらす。すると、彼女の方からしがみついて来た。

「……深川」

「好き」

彼女の背中に両腕を回した。小さな身体をぎゅっと抱きしめて、深呼吸した。

誘うように、彼女が顔を上げて俺を見つめた。

「通行する人の邪魔になるから」

俺は言った。

「歩こう」

そう言うと、彼女は無言で頷いた。

第十五話 深川由貴奈（後書き）

こんな展開ですみません（一応謝罪）。

というか、ついまた続きを書いてしまいました。

勢いづいてると筆が進む（というか頭の中がそれ中心）という気がします。

この手のウジウジしたキャラは、実際に目の前にいるといじり倒したくなりますが（大抵は思うだけです）小説で書くのは好きです。逆に女性キャラでウジウジ悩んでる主人公をあまり書かないのは、たぶん私の周囲にいる女性の半数以上がポジティブで活動的でちよっぴり強引（でも可愛い）人達だからだと思います。

最近、サイトをまとめて縮小した方が良いだろうかと悩み中。

家族がもうすぐ手術するので、定期的にコンスタントに更新するのはたぶん無理だと思います。

第十六話 高杉清隆

「よお、ムツツリスケベ。見たぜ、今朝」

顔を合わせた高杉清隆^{たかすぎきよたか}に言われて、思わず動揺した。

「な、何を」

「同伴出勤。ってかいったいいつからそういう仲になったんだよ。」

昨日までは興味なさげな顔してたくせに」

「朝、偶然駅で会っただけだ。いやらしい言い方するな。別に夜は一緒じゃなかったからな」

言い訳がましい口調になってしまった。高杉は愉しそうにニヤニヤ笑いながら言う。

「ん？ 何だ？ もしかして告白でもされたか？」

まさか全部見られてたのか。思わず顔が熱くなった。

「いやーん、サッチンたら青春？ 遅咲きの春？」

「サッチンはやめてくれ」

寒い。

「サッチャン？」

「……頼むから、普通に呼んでくれないか」
間違はなく遊ばれている。

「ってか、ユキナちゃんもう告白しちゃったのかよ。俺が折角、盛り上げて、ドラマチックに告白タイムを演出してあげようと思ってたのに」

高杉が半ば冗談、半ば本気口調で、悔しそうに言った。

「……待て、高杉」

「ん？」

「お前知ってたのか？」

「ああ。相談されてたし」

「……お前に？」

「アキちゃんがまず相談受けて、来生ちゃんが俺の高校時代の後輩

だから、そっち経由で話が来て」

「だから合コン？」

「目的は達成したみたいだけど、合コンはやるぞ。お前だけおいしい思いをするのは悔しいから。梶木は確実に振られるけど」

「……そうなのか？」

「だって来生ちゃんは彼氏いるし」

「なら、梶木に教えてやれば良いじゃないか」

「いや、梶木は振られた方が肥やしになるから大丈夫」

「……そういう問題か？」

「お前みたいに後生大事に抱えて醜態して腐りかけないから。お前はもっと気楽に考えろ。人生楽しめ。梶木はこのところ調子に乗りすぎだから、凹んだくらいで調子良い」

「……………」

人生楽しめ、って。いったい何をすれば良いんだ。

少なくとも、恋愛は俺にとって楽しみじゃない。それはなくても生きていける。

「何だよ、テンション低いな。付き合う事にしたんだろう？ それとも後悔してるのか？」

後悔？

「……………」

してるのか？

「おい、井上。面倒なこと考えずに、単純に考えりゃ良いだろ。お前はユキナちゃんに告白されて嬉しくなかったのか？」

「いや」

嬉しかった。それは間違いない。

「じゃ、何を気にしてんだよ？」

「……………」

どう考えても、真面目とかストイックとか、クールとか誠実とか——俺に対する形容詞だとは思えない。

どう考えても、彼女が俺自身を好きだと言っているとは思えない。

ため息をついた。

「……お前、贅沢じゃないか？」

呆れたような声で高杉が言った。

「そういうんじゃないかって……クールってどういう意味だと思う？」

そう言うのと、一瞬高杉は絶句してマジマジと俺を見つめたかと思うと、ブツとふき出し笑い転げた。

「……………」

こいつに言うんじゃないかったと後悔した。

「……なに、クールとかって言われたの？ お前が？」

「……もういい。忘れてくれ」

「それで気にしてんの？ お前のキャラじゃないから？ そんな事実際に付き合い始めたら関係ねえって！ 逆に、付き合ってる最中の恋人がクールだったら、その方が問題だろ。付き合う前の勘違いや思い込みは、付き合ってく内に解消していきや良いだろ。余計なこと気に病むなよ、バカ。見てる方は面白いけどさ」

「……慰めてるつもりなのか、凹ませるつもりなのか、いったいどっちなんだ」

ため息をついた。

「細かい事は気にするな。いちいち気に病んでいたら、神経もたないぞ」

高杉はニヤニヤ笑いながら言った。

「お前本当どうでもいいこと気にするよな」

それはケツの穴が小さい男だと暗に揶揄されているのだろうか。「お前は何でも面倒に複雑に考え過ぎ。頭デッカチ過ぎるんだよ。だからかえって何もできなくなるんだろう。気楽になれよ。力を抜け。楽しい事だけ考えてみろよ。プライベートでは、さ」

そう言われて簡単に切り替えられるなら、苦労はしない。

「……羨ましい性格だ」

「そう思うなら尊敬しろ」

「それは無理だ」

俺が答えると、高杉は愉しそうに笑った。

第十七話 夢のような幸せ（二）（前書き）

後半少々官能的（？）な表現があります。

第十七話 夢のような幸せ（一）

「井上さん、良いですか？」

昼休憩、深川が訪ねてきた。

「え、何、深川由貴奈？ おい、井上、どういう事だよ」
隣の席の同僚・梶木寿義かじきひさよしが肩を寄せて聞いてくる。

「後で話す」

そう言って立ち上がる。

「メールしようかとも思ったんですけど、直接来ちゃいました」

「うん、何？」

「あの、よろしかったらお昼一緒に食べませんか？ 都合悪ければ結構ですけど」

本当は先に作っておきたい書類があったが、別に急ぎじゃないから、休憩後でもかまわなかった。

「良いよ。どうする？」

「外に出ませんか？ おすすめのお店があるんです」

「判った。今、机の上片付ける。少し待ってて」

「はい」

深川は紅潮した顔で頷く。思わず唇がゆるんだ。

「……井上」

席に戻って、作成途中の書類を保存して終了させていると、椅子越しの背中に、梶木がのしかかってきた。

「……気色悪いから、耳元に息を吹きかけるのはやめてくれ」

「いつからそういう事になったんだよ。水臭いぞ。いつの間にどうやって口説いたんだ」

「後で話すから、離れてくれ」

「後でっていつだよ」

昼食後はしたい事がある。

「……………」

夜か？ だけど、明日も飲む予定なのに、平日に二晩続けて飲みに行くのは少々辛い。話事態はすぐ済むと思うが、何となく絡まれそうな気がする。

「梶木、邪魔しないでやれ。今一番楽しい時なんだから」と、高杉が助け船を出してくれる。

すまない、と黙礼すると、高杉はニヤリと笑った。

「じゃあ」

と言い置いて、上着をはおり、内ポケットに財布を入れて、立ち上がる。

「バックレるなよ？」

梶木はしつこい。肩をすくめて、深川の元へ向かった。

「ごめん、行こう」

「はい、井上さん」

正直、人前で手を握ったり腕を組んだりするのは苦手だ。

だけど、深川はそうするのが当然とばかりに、腕を回してくる。

自意識過剰かもしれないが、さっきから注目を浴びているような気がして、何となく目を伏せてしまった。

「井上さん」

「何？」

「昼食、パスタなんですけど大丈夫ですか？」

「好き嫌いはないから」

あえて言うなら、ドリアンが苦手だ。昔、修学旅行先でドリアンのジュースを注文してしまい、臭いで挫折した。あれならニッキ水——シナモン入りの甘い飲料。慣れないと匂いがきつい——を一リットル分一気飲みする方がマシだと思う。

しかし通常ドリアンは滅多に見ないものだから、あえて申告する必要はないだろう。

「井上さんは普段何を食べてるんですか？」

「たいしたものは食べてないよ」

「例えば昨夜は？」

何となく恥ずかしくなった。

「井上さん？」

「……いや、昨夜は食べ忘れたから」

主にあのバカのせいで。食べる暇もなかったし、食べようという気にもなれなかった。折角のおでんは冷めてしまったし。

「え、大丈夫なんですか？ 今朝は食べて来たんですよね？」

「……おにぎりを」

昨夜食べる予定だったのを、捨てる代わりに、腹の中に入れた。惣菜は一応冷蔵庫に入れ、おでんはもったいないが、食べる気になれずに捨てた。

「え、やだ、井上さん。いつもそういう食生活してるんですか？」
そういうわけじゃない。

「いや、昨夜と今日はたまたまで……」

「じゃあ、その前は？」

しまった。

「立ち食い蕎麦で素うどんだった。でも、その日は遅くまで残業したから……」

疲れたし遅くなったから、簡単に済ませたかっただけで。それだけなんだが。

深川の顔が心配そうな表情に変化したのを見て、少し後悔した。

「井上さん」

深川が真っ直ぐな瞳で俺を見上げる。

「う、うん」

「食事はきちんと取らないと駄目ですよ」

それは判ってる。判ってるつもりだし、普段は本当にもう少しマシで。

……だけど、どのくらいマシかと言えば、五十歩百歩なレベルなのかもしれない。

そう思うと、結局何も言えなくて。

「作りましようか？」

「……え？」

きょんとしてしまった。

「私、あまり上手じゃないですけど、井上さんの現在の食生活よりはたぶん良いものが作れると思います」

「え、良いの？」

「はい」

深川は恥ずかしそうに微笑んだ。

「井上さんが食べたいって言うってくれるなら、頑張って作ります」
その顔が可愛くて。それに嬉しかった。

「有り難う」

思わず顔がゆるんでしまう。俺が笑うと、深川も嬉しそうに笑った。

心が暖かくなる。ひどく優しい気持ちになった。嬉しくて、平穏で、幸せな。

……そうだな。たぶんこれで良いんだ。

時折触れる胸の感触だけは、どうしても慣れなくて、気恥ずかしくなったり、落ち着かない気持ちになったりするけど。

高杉に聞いて、彼女と行く先を幾つかピックアップしておこう。本当は自力で探しておくべきなんだろうけど、俺はそういう観点で外食した事はなかった。いつも空腹を満たせるかどうかが価値基準になっていたので。

今更気付いた。俺は楽しむための食事というものを、ほとんどしない生活をしていたんだな。食事時間もバラバラで、栄養バランスなんて考えてなくて。

「井上さん？」

深川が心配そうに声をかける。

「ごめん」

そう言って、なんとなくそうしたい気分になって、人目を確認してから、彼女の腰に手を回した。エッチな意味でなく、彼女との距離を縮めたくて。この嬉しくて幸せな気分を彼女に伝えるには、言

葉じゃ足りない気がする。

「あ」

深川の顔が真っ赤に染まる。

「い、井上さん？」

「嫌？ 嫌ならやめるけど」

「あ……いえ、嫌じゃないです」

「ごめん、嬉しくて」

「……私も」

深川は真っ赤な顔でうつ向いて呟いた。

「私も、嬉しいです」

可愛い。すごく可愛くて。

思わず腰に回した手に力が入ってしまっ、腰骨から下腹辺りに指が滑ってしまう。

「！」

「ご、ごめん」

焦る。だけど、一度身体を離そうとしたら、深川が腰を押し付けるように密着してきて、どきりとした。

「……深川」

そう言っ、身を離す。

「え？」

深川は不思議そうな顔をする。

「……嬉しいけど、ちょっとくっつき過ぎ。食事どころじゃなくなるから」

すると深川は潤んだ瞳で、俺を見つめた。その目が、唇が誘っているように見えて、彼女の腰に手をかけ、抱き寄せながら、もう一方の手で、顎を掬い取るように上げさせて、そっと唇を触れ合わせた。

彼女の両腕が俺の背中に回り、ギュッとしがみついてくる。俺は上下の唇をゆっくりと交互に食むようにしてから、舌先で柔らかな唇の輪郭を辿るように舐めて、ゆるんだ唇をこじ開けるように舌を

侵入させると上顎をそつと舐め上げてから、彼女の舌を絡め取りながら、優しく唇を吸った。

幾度か角度を変えながら、柔らかく唇を食み、吸う。優しく、ソフトに。彼女の柔らかく甘やかな唇を味わいながら。

「い……のうえ、さ、ん」

唇を離すと、深川はぐったりと俺に身を預けて、目を閉じる。その髪を優しく撫でた。

深川は幸せそうに微笑んだ。

「好き」

そう呟いた深川を、愛しく感じて、俺は無言で抱きしめた。

第十七話 夢のような幸せ（一）（後書き）

今回のあとがきは、ネタバレが嫌いな方は読まない方が良いと思われます。

←

←

←

一応『夢のような幸せ』は間に合コン話を入れて計三回となる予定です。

今後の展開を全く匂わせないサブタイトルはキツイだろうと思い、こんなサブタイトルを付けてみました。

あからさま過ぎず、しかし匂わせておきたいと考えた結果のつもりなんです、成功しているかは謎です。

第十八話 夢のような幸せ(二)

深川が案内してくれたのは、スタイリッシュで品良くシックな、黒を基調に、赤と緑と白を配した、オープンテラスのあるイタリアン・カフェだった。

黒いエプロンを身に付けたウェ이터に、テラスに案内されて、二人掛けの席に向かい合って二人で座る。

なんだか妙に緊張してしまって、まともに正視できなかった。

煙草を吸いたい気分だったが、案内されたのは禁煙席だったので吸うわけにいかない。

今更ながらしまったと思う。

「注文決めようか」

間がもたないから、メニューを広げる。チラッと見てボンゴレに決める。

「何が食べたいの。ここは奢るよ」

二人合わせて千八百円から二千八百円予定。

デザートを付けたとしても三千円ちょっと。大丈夫、問題ない。

深川はボロネーゼを選んだ。ウェ이터を呼んで注文した。

「井上さんは、休みの日、何をしてるんですか？」

「え？」

どきりとする。

「だいたい寝てるか掃除してる。深川は？」

「音楽聴くのが好きだから、音楽聴いたり。時折ショッピングに行ったり」

「音楽？ ポップスとか？」

「好きなアーティストもいますけど、最近はクラシックも良く聞きます」

「へえ、例えば？」

意外だ。

「ツイーマンってピアノスト知ってますか。友達に薦められて借りて聴いたんですけど、それまでピアノだと思ってた音が嘘みたいに美しい音色と旋律なんです。初めて聴いた時、号泣しちゃって。本当はあまり詳しくないんですけど、彼のCDだけは買い集めてるんです。実はまだ三枚しか持ってないんですけど」

「へえ、そうなんだ？」

なんとなく見た目だけでギャルっぽい子なのかと思っていたけど、意外だ。でも、そのギャップが良い。

「俺も聴いてみようかな」

「本当ですか？　じゃあ、良かったらお貸しします」

「うん、有り難う」

良いな、こういう感じ。忘れていた気がする。穏やかな優しい時間。まるで、夢のような幸せ。

微笑んで彼女を見つめた。すると彼女も幸せそうに微笑んだ。

「映画とか、好き？」

俺は尋ねた。

「はい。社会人になってからは、あんまり見に行けてないですけど」

「一緒に見に行かないか、今度」

「はい。嬉しい」

顔を染めて笑う彼女が可愛くて、なんとなく困って、目線をそらした。

「良い天気だね」

「はい。今週いっぱいはいらしいですよ、週間予報だと」

「本当？　じゃあ、今度の土日も？」

「はい。予報通りなら、お天気です」

「……あの」

何故ここで詰まってるんだ。

「え？」

「ごめん。今週末……予定、ある？」

「予定？ 明日の夜の予定以外は、今のところ特にないですけど」

「良いかな？」

「もっと、知りたい。」

「え？」

「……デート」

そう言ったら、深川は満面の笑みを浮かべた。

「はい。ぜひお願いします」

その丁寧過ぎる言葉に、思わず失笑してしまった。

「もっとくだけて良いから」

「あ、は、はい」

深川は真っ赤になっている。そっと手を伸ばして、彼女の左手に自分の右手を重ねた。

「井上さん」

返事の代わりに彼女の手を握った。華奢な指は、白くて頼りなげなのに、暖かくて。

幸せな気分で、笑った。

「おーい、井上」

事務所に戻ると、梶木と高杉が待ち構えていた。ニヤニヤと高杉が手招きしている。

「な、何だ？」

「とぼけんなよ、井上。判ってるだろ？」

ニヤニヤ笑って高杉が言い、

「昼食デートの報告しろよ。ノロケなしで」と梶木が言う。

「報告って、ただ一緒に昼食食べただけだ」

キスはしたけど。そんなのこいつらに言うような事じゃないし。

「井上はムツツリスケベだからな。シラッとした顔で、昼食以外に

別のモンも食ってるかもしれない」

高杉が言い、

「なにげに秘密主義で腹黒いよな。真面目なツラして」と梶木が言う。

「何故そこまで言われなくちゃならないんだ」

俺が言うと、梶木が急に裏声で、

「アアッ、やめて。こんなところで！」

「良いだろ、深川。俺のこと好きなんだろう？」

高杉が作り声で言う。

「アアッ、やめてッ！　こんなところじゃ嫌ッ！」

「じゃあ、どういう所なら良いんだ、言ってみろよ、ん？」

高杉がそう言って、フルフル首を振る梶木の顎を掴む真似をした。

「……………」

お前ら、そういう目で俺を見てたんだな。

「ヤダ、白い目で見られてるわッ」

梶木が俺を指差し、

「まあ、恐っ。まるでムシケラを見るような目つきねっ。確実に人を殺してるわッ」

何故そこまで言われなくちゃならないんだ。

ため息をついて、席に座り、パソコンの電源を入れた。

「……………って無視すんなよ」

梶木と高杉が後ろから肩を叩いてくる。

「……………煩い」

「拗ねるなよ？」

高杉が言った。

「俺達はお前の帰りを待ってたんだぞ」

……………頼んでない。

「サッチャンたら照れ屋さん」

「さー坊、さあ、ママに全部教えて」

……………本気で煩い。

「仕事しろよ」

言うと、

「うわー、ムカつく」

「後でいじめてやる」

などと言われた。

いったい何が楽しいんだ。単にからかわれてるだけだと思うが。
今度からはメールで待ち合わせしようと思決した。

第十九話 前夜

金曜日のために木曜日は残業して、仕事を片付けた。不測の事態が起これない限りは、大丈夫な筈だ。

明日は内部のミーティングや、クライアントとの打ち合わせの予定等が入っている。

そういえば水着がいるんだな。一応持ってるけど、どこにしまったか記憶が薄い。新しく買った方が良さだろうか。

たぶんレンタルできると思うが、インナーをはくとしても直接肌に身に付けるものだから、あまり気は進まない。

しかし、十時過ぎて水着を買えるような店なんか知らない。

今更だが、私服も何か買っておいた方が良さのだろうか。

……って、俺は何を浮き足立ってるんだ。今更ジタバタしても仕方ない。

水着はちゃんと探そう。捨ててないからある筈だ。最悪はレンタル。もしかしたら売っているかも知れない。

私服は、とりあえず普段の恰好で良いじゃないか。別に見苦しくはないし。

当初はどうでも良かった筈なのに現金だ。

バカかも知れない。

ガキじゃないんだから、落ち着け、俺。

それより今夜の食事はどうしよう。

昼間、深川と一緒に帰れないかというメールを貰ったが、仕事があるからと断った。

その代わり、明日は同じ電車の同じ車両に乗る約束をした。まるで高校生だ。

「よし、行くか」

と梶木が俺の肩をポンと叩いた。

「今日は帰って寝る」

そう言うと、

「祝杯を上げてやろうというのに断る気か」

高杉が言った。

「明日は大事な打ち合わせがあるんだ。酒は飲めない」

「別に飲めとは言ってないさ」

高杉は人の悪い笑みを浮かべた。

「そうそう」

梶木がニマニマと笑いながら頷く。

「要はお前が正直に吐けば済む話だからな」

……何が楽しいんだ、本当に。

「本当、井上は甲斐性のない男だな！」

梶木がつくねを振り回しながら言った。

「お前に甲斐性がどうこう言われたくない」

俺は烏龍茶を飲みながら、呟いた。

「俺は来生舞ちゃん一筋だし。絶対落とす！」

「……三ヶ月前は違う女の名だったよな」

「ユイは既に思い出、過去の話だろ。今はマイちゃんだけ」

高杉はニヤニヤ笑っている。

「なあ、梶木。その来生だけど……」

言いかけた途端、高杉に足の甲を思い切り踏まれて、悲鳴を上げそうになった。

「……なっ！」

「確かに来生はいい女だよな。姉御肌で働き者で、サラッとしてるくせに時折妙に女っぽいいし。高校の時からモテたけど、化粧し始めてから、髪を伸ばして別人みたいに美人になったからな」

と高杉が言う。ギロリと睨むと、何故かVサインを出された。理解不能。

「おい、高杉。マイちゃんに手をだす気か？」

「大丈夫、大丈夫。何もしないって、見てるだけ。その方が面白いし」

「……お前な」

俺は高杉を睨んだ。

「お前は良いよな。棚ボタだもんな。何もしなくても相手から転がり込んできて」

高杉がビール片手に小突く。

「お前、彼女いるんだろ。なんでそんなふうに言うんだ」

「だって若くてピチピチじゃないか、ユキナちゃん」

「そういう問題か？」

「本当は一目見た時から気に入ってて口説こうかと思ってたのに」

「冗談だろ？」

俺は一瞬ギクリとした。

「冗談だよ。何本気でビビってんだよ、バーカ」

高杉はケラケラ笑った。

「……………」

悪質だ。

「確かに深川由貴奈、今年の新入社員でダントツだったしな。たぶん今頃泣いてる男いっぱいいるぞ。職場で堂々といちゃつきやがって」

「いちゃついてない」

「嘘を言うな。腕組みして、鼻の下伸ばしてたくせに」

梶木はそう言って、頬を掴まれ、箸袋を鼻の穴に差し込まれた。

「……やふえろ」

「うわー、間抜け顔」

高杉に携帯で写真を撮られた。

高杉はそれをいそいそとどこかに送っている。

「何してるんだ」

「んー？ ユキナちゃんのところ」

「何？ おい」

高杉の腕を掴んだ。

「送信終わってるよ。お前と梶木にも送ったから着信メール。」

……脱力した。

「……お前ら最低だ」

「愛情表現だろ？」

「そうそう、愛のムチ。激励と応援」

「……絶対違う。お前ら面白がってるだけだ」

「「当たり前だろ」」

梶木と高杉が声を揃えて言った。
頭が痛い。

第二十話 朝（一）

金曜日の朝。あまり快適とは言い難い目覚めで迎えた。

俺はため息をつきながら、立ち上がり、床に転がっている二体の障害物を避けて洗面所に向かい、顔を洗う。

素面で酔っ払いに付き合うのは、二時間が限度だ。それ以上は飲食の量を加減しないと胃腸がもたない。

最初から徹夜が判^{オール}っていたいれば、それなりにセーブするなど対処できるが、そうでなければ胃腸薬の世話になる羽目になりかねない。

とりあえず、生ゴミのように居間の床に転がるマグロもとい二人の男は、この際ギリギリまで放置する事にしよう。

根に持っているかと問われれば、それほどではないと答えるが、だからといって無条件で許せるわけでもない。悪意はないだろうとは思うが、あの写メについてはちよつと腹を立てている。

俺はあの後、隙を狙ってトイレの中から彼女にメールを送った。

『今日はごめん。今、仕事終わって、高杉と梶木と飲んでるところ。ところで高杉からのメールだけど、見ないで捨てて良いから』

ところが返信は

『お疲れさま。楽しそうですね。写メはさっき見ました。初めての井上さんの写真だから、笑っちゃったけど保存してあります。できれば井上さんの写真もつと欲しいな』

見た瞬間、思わず悲鳴上げそうになった。

『あんな写真捨てて良いから。写真欲しかったらいくらでも送るし』そのメールには、一応データフォルダにあったとりあえず一番マシそうな写真を付けて送った。

『嬉しい、井上さんの写真。早速待受に登録です。私の写メも送ります』

深川の写真はとても可愛かった。下から上を見上げるような構図で、はにかむような微笑みが魅力的で。

「……………」

会いたい、と思った。今すぐにでも会いたい、と。だけど俺は深川の住所も知らない。

だいたい女の子の家に訪ねて行ける時間でもない。代わりに電話しようとした時、トイレのドアがガンガンと叩かれた。

「おい、井上ッ。何閉じ籠ってんだ。大きい方か？ 後がつかえてんだから、さっさと出ろッ！ じゃなきゃドア越しにひっかけるぞ、コラ」

梶木の声だ。というかそれは俺だけじゃなく店にとっても迷惑だからやめろ。最低だ。

「……………」

悪意の有無は関係ない。本気でも冗談でも質が悪い。諦めて外に出た。

「おーし、出た出た。アリガトサンガッ」

……笑えないだろ、それ。ため息をつきながら戻る。

「そろそろ帰りたいんだけど」

高杉にそう言うと、

「は？ まだ十一時前だろ」

顔をしかめられた。

「だから、明日は大事なミーティングが」

「とか言って本当はラブコールしたいだけだったりしてな、このムツリが」

いきなり凶星。だが平静を取り繕って、

「明日は少し早めに行きたいからな。だいたい俺は素面なんだ。お前らに付き合える筈ないだろ。平日なのに飲みすぎだ。それで明日大丈夫なのか？」

「仕方ないだろ。飲みたい気分なんだから。自分の限度は良く判ってる。酒を飲むくらい良いだろ。説教すんなよ」

「別に説教してるわけじゃない。忠告してるんだよ」

「お前、うるさいし、理屈っぽいよ。なんでユキナちゃんはお前が
良いんだろうな」

「……そんなの、俺が知りたい。何か勘違いしてるんじゃないかと
思うけど」

「は？ 何言ってるんだよ。じゃあ、お前はどのように彼女と付き合う
事にしたんだよ」

「……いや、それは」

高杉の剣幕に気圧される。

「……彼女を泣かせたら、承知しないぞ」

ギラギラした目つきで睨まれた。

「お前に言われる筋合いはないだろ」

なんだかムツときた。

「それはそうだろうけど、俺は相談聞いてきた立場だからな。口出
しする権利はあると思うぞ。お前がどう思おうと、彼女はお前を真
剣に好きなんだ。軽い気持ちじゃない。ふざけた真似をしたら、殴
り飛ばすぞ」

「……高杉」

嫌な感じがした。

「お前、何故そんなに肩入れしてるんだ？」

まさか、と思った。

「まさかお前、本気で……」

「バカ野郎、俺は保護者なんだよ。悔しいから教えなくなかったけ
ど、俺はここ一ヶ月、彼女の話を聞いてたんだ。お前の話ばかり聞
かされたし、うんざりするほどお前の話ばかりさせられたよ。少し
は肩入れしたくなるだろうが」

「……高杉」

高杉の顔は、アルコールのせいか、苛立ちのせいか、あるいは羞
恥のせいか、少し赤かった。

「一応誇張せずにありのまま話しておいたぜ。お前がバカでボケで
ムツツリな事とか、字が汚くて読めない事とか、入社したばかりの

頃に、誤ってネットワークの共有フォルダを削除した事とか」

「は！？ そんな話をしたのか！？」

思わず血の気が上った。

「一応前の彼女の話はしなかったぞ」

高杉は言った。

「ただ、引きずってるかも知れないとは言ったけど」

……余計な事を。

「別に引きずってるわけじゃない」

「そうか？」

「違う。そういうわけじゃない」

「……だけど気にはしてるだろう」

気にしてるのは、有子じゃない。有子が言った言葉だ。

胸に深く刺さって忘れられない。

『だけど覚は私のこと、そんなに好きじゃなかったでしょ？』

何故、思い出す度に心が痛くなるんだろう。有子の顔は忘れたくせに、あの時の言葉を、あの時の声を、あの時の冷たく突き放すような、どこか諦めるような、冷めた口調を忘れる事ができないのだろう。

それは、きっと彼女の本音で、自分にも心当たりがあったからじゃないのか。

「……………」

「井上」

高杉が頭を下げた。

「すまない」

謝る必要はない。謝られたくなんかない。

「謝るなよ」

言っと、高杉は神妙な顔つきで俺を見た。

「井上、今の……できたら忘れてくれ。ごめん」

忘れる？ それは無理だな。俺は素面だ。だけど俺は頷いた。
「判った」

だが、まさか自宅までこいつらが押し掛けて来るとは予想外だった。

例のコンビニ——変な女のバイト先——に酒を買い出しに行って二時過ぎくらいまで騒いでいた。付き合いきれないから、俺は早々に眠ろうとしたが、絡まれた。最後の方の記憶はほとんどない。

気付いたら、居間でゴミに混じって雑魚寝していた。

フロアリングに直接敷いた薄い絨毯の上で背中を丸めて寝ていたから、身体中が痛い。

最低の気分だ。朝食なんか食べる気にもなれない。

昨日反省したところなのに、駄目だと思う。

だけどやっぱり無理そうだ。

一朝一夕には変わらない。

俺は意思薄弱で、根性がない。

それでも彼女は、深川は俺を好きだと言ってくれるんだろうか。

正直、あまり自信はない。

俺は彼女に少しずつ惹かれていた。

『そんなに好きじゃなかったでしょ？』

有子の声が、脳裏でこだまする。

頼むから、何も言わないでくれ。

気付いても指摘しないでくれ。

お前は冷酷な人間だと責められるような、欠陥人間だと糾弾されているような気がするから。

好きかどうか、そんなに大事か？

それは罪なのか？

大切だと思っただけじゃいけないのか。

そばにいたいと願っただけじゃ駄目なのか。

その身体を、声を、優しさを、愛情を望むだけじゃ駄目なのか。
好きってどういう感情だよ。

俺が思ってるものは、感じているものは、何か人とは違うのか？
好きじゃないって、だったら、俺は何なんだ？

俺は何を、どう思ってるって言うんだよ。

俺の気持ちを、感情を否定するなら、答えもくれよ。

じゃなきゃ、俺は理解できない。

拒絶するなら、それでも良い。

だけど、俺はどうしたら良い？

いったい何をどうしろっていうんだよ。

俺が間違ってるっていうなら、何をどう間違えているのか教えてくれ。

完璧な人間になりたいとは思わない。

だけど、俺は異端だと、異常者だと、欠陥人間だとは言われたくない。

それが、ただの事実だったとしても。

自分がそんな人間だとは、思いたくない。

俺は、自分を好きになれなくても、嫌いにはなりたくないし、憎悪したくない。

平凡で良い。普通でいたいだけなんだ。

平穏で、普通で、当たり前前の人生を、心穏やかに過ごしたい。

大それたことなど望まない。

だけど俺は、間違っているのか？

鏡の中の自分に問いかける。

血色の悪い陰鬱な顔つきの、死んだ魚のような目をした男が、物問いたげにこちらを見返している。

……酷い顔だ。こんな顔を人に見られたら、それだけで通報されそう。

苦笑は引きつり強張った、不自然な顔になった。

温かいシャワーを浴びよう。少しはマシになるかもしれない。

第二十一話 朝（二）

幸せな事を考えよう。嬉しかった事、楽しかった事を考えよう。
じゃなきゃ俺は奈落の底まで落ちてしまいうさだ。

温かなシャワーを浴びながら、考える。

深川由貴奈。俺は彼女の事をほとんど知らない。何を考えているのか判らない。

彼女のゆるくカールする美しくつややかで滑らかな髪の毛の感触、柔らかなで気持ちの良い甘い唇、柔らかなで弾力のある胸のふくらみを思う。

もっと触って確かめるべきだったかな、とふと思う。

そんなに焦る必要はない。だけど俺は無性に恐かった。

早く彼女を俺のものにしてしまわないと、彼女と深い仲になっておかないと、奪われてしまうのではないだろうか。

奪われるって誰にだ。高杉にか？　だけど高杉が薦めてきたんだぞ。だけど、高杉は怪しい。

駄目だ。かえって混乱している。落ち着かない。

彼女の声が聞きたい。彼女に触れて確かめたい。

『好きじゃなかったでしょ』

もう嫌だ。やめてくれ。

忘れたいのに。忘れて楽になりたいのに。疵きずは塞ふさがるどころか広がるばかりな気がする。

あたたかさが欲しい。慰めが、優しさが、安らぎが欲しい。

致命的に何か足りない。足りなくて苦しい。切ない。

俺はたぶん病んでいる。だけど何をどうしたら良いか判らない。

何も考えたくない。考えれば考えるほど、どつぽにハマる気がする。

結局あまりすっきりしなかった。だけど、血色の悪さは少し改善されて、少しはマシな顔になった。

そのことにホッとして、肩の力を抜いた。

ドライヤーで髪を乾かし、セツトする。

それから寝室へ移動する。

ノリのきいた白いシャツに腕を通す。商談のある日は、クリーニング屋に出した、いつもより上質なシャツとスーツを着る事になっている。ネクタイは絹のブランド製。

華美ではないシンプルなデザインネクタイピンを付ける。

だんだんと、気分が落ち着いてきた。

落ち着いたら、無性に煙草が吸いたくなって、サイドテーブルに手を伸ばした。

くわえてから、ジッポーを目で探す。そういえば、居間に置きっぱなしだった。

取りに行くのは少し面倒だった。代わりに百円ライターを手にとった。

息を吸い込みながら、火を付ける。

目を閉じてゆっくりと、紫煙を味わう。

それは舌で、味覚で味わっているわけではない。

だけど、それでも嗅ぐというよりは、味わうという表現の方がしっくりくる。

その香りを、口内で、嗅覚で、肺で、全身で味わう。

臓腑に、神経に、染み渡る気がする。

何かが音もなく開いていくような、覚醒するような、心の澱みを底に沈めて、上澄みがきれいに静かに、透明になって鋭くなるような。

錯覚だ。たぶんニコチンが見せる、短い夢。

何も解決していない。何も変化していない。

それでも何か救われたような気がするから。……もしかしなくてもニコチン中毒だ。また、カフェイン中毒でもある。やめるくらいなら、人間やめた方がずっとマシだ。

三分の二まできっちり吸いきると、灰皿に押し付けて揉み消し、

キッチンへ向かう。

それから湯を沸かして、インスタントコーヒーを入れる。

コーヒーメーカーもエスプレッソマシンも買ったくせにほとんど使っていない。押し入れのどこかにある筈だ。

一人暮らしだと、入れるのが手間で見倒れだ。入れたくても豆を買ってない。インスタントで十分だ。負け惜しみではなく。

「う、おはよう」

高杉が明らかに二日酔いの顔で、こちらを見た。

「何か飲むか？ インスタントコーヒーか、水か、烏龍茶」

「目の覚めるヤツ」

コーヒーを入れてやる。梶木もモソモソと起き上がる。

「あー、もうすっかり支度してやがる。そんな暇があるなら起こせよ。カッコつけやがって」

梶木が恨めしげに言う。

「そういうんじゃない」

ため息をつきながら言った。別に格好つけとかそういうわけじゃない。

「井上は、修学旅行や慰安旅行でも、一番最初に起きて、まず身支度するやつだよな」

「お前と修学旅行に行った事はないだろう」

「スーツに皺つけてやる」

そう言って身構える梶木に、

「頼むからやめてくれ」

と懇願する。

「じゃあ、俺は先に行く。鍵は玄関の棚の上にあるから」

「メシは？」

「食べたかったら何か外で食べてくれ」

「井上、お前何を食って生きてんの？ 冷蔵庫はいつ来ても空だし」

梶木が不思議そうに言う。

また言われている。

「適当」

「身体壊すぞ？」

梶木だけでなく、高杉も顔をしかめて、俺を見た。

「こう見えて昔から頑丈なんだ。風邪なんかほとんど引いた事がない」

「でも食は細い方だろ？」

「食べる時は食べるよ。昼は会食だし。問題ない」

「問題ない、ねえ？」

高杉が首を傾げた。

「食ったり食わなかったりする方が、身体に悪いと思うぞ」

自分でも判ってる事を、あえて人に指摘されて、諭すように言われると、何故こんなに気まずく居心地悪く感じてしまうのだろう。

「気をつけるよ」

そうとしか言いようがない。

玄関を出たところで水着を忘れた事を思い出したが、顔をまた合わせると、先ほどの続きになるような気がした。

それに深川との約束もある。

とりあえずコンビニでゼリー飲料を買って、駅に向かった。

その途中でメールを打つ。

『おはよう。これから駅に行くところ。今、何してる？』

なれなれしすぎないか、あるいはそっけなさすぎたりしないか。暫く自分の書いたメッセージを読み返してから、送信した。

あまり気分が高揚していない自分に気付いていた。

昨日の午後はそうじゃなかった。

日によって気分が変わるのか。

そんなものか？

会えば変わるのだろうか。

変わらなかったらどうしよう、と少し不安に思った。

テンションが低いのは、寝不足のせいだろうか。それとも貧しい食生活のせい？

俺はため息をついて、携帯端末を見た。
メールの返信は、まだ来ない。

第二十一話 朝（二）（後書き）

諸事情で更新速度遅くなります。
申し訳ありません。

第二十二話 夢のような幸せ（三）

「おはようございます、井上さん」

深川は二駅後に乗り込んで来た。

にっこりと微笑む顔を見て、安堵した。

「おはよう、深川」

「今日のスーツとネクタイ、素敵ですね」

「今日は客先に訪問するから」

「井上さん、いつもそうですね」

「……見苦しいのは嫌だから」

「カッコイイです」

思わず顔をしかめてしまった。

「カッコイイ？」

そんなこと言われたのは初めてだ。

「え？ 私、変なこと言いました？」

「あ、いや」

慌てて眉間の縦皺をゆるめて笑みを作る。

「そうじゃなくて。そんなふうに言われた事がないから」

「井上さんはカッコイイですよ。切長の目が涼やかで、キリッとしてて理知的で。眼に力があるから、真正面からジッと見つめられるとドキッとしちゃいます」

目つきが悪いだの、冷たく見えるだの、人相が悪いとか怖い、凶悪だのと言われた事はあるが、褒められた事は全くない。

「初めて言われたよ、そんなこと」

「それは井上さんが、ちょっと近寄り難く見えるからじゃないですか？」

深川が首を傾げて言った。

「……怖い？」

「話をしている時の井上さんは恐くないです。むしろ気を遣ってく

れて優しいですし」

優しい？

それは本当に俺に対する形容詞かと思う。

その逆ならいくらでも言われた事がある。

正直、自信がない。

「井上さんは、もっと自信持って良いですよ」

深川は笑った。もしかして同情されているのだろうか、と思ってしまった。

だが、深川の笑顔に裏は感じない。

こんな事考える俺はひがみっぽいのかもしれない。

少し落ち込んだ。

深川は可愛い。真っ直ぐに見つめられ、微笑まれば、心が揺れる。

その上、その柔らかい胸を押し付けられたりしたら、まともな思考なんか働かない。

煽られ、気分が高揚し、もっと触れたい、感じたいと思ってしまう。

「深川」

「なんですか？」

「どうして俺が好きなの？」

だって俺は何もしていない。好かれるだけの何かを持っているわけでもない。

少なくとも、一目惚れされたりするような容姿ではない事だけは確実だ。

「井上さん、いつも誰と挨拶する時も、人の顔を見て挨拶するんですよね」

「普通はそうだろ？」

そう答えると、深川は苦笑する。

「そうとは限らないんですよ。胸ばかり見る人とか、目を全く合わさない人とか、逆にジロジロ見る人とか。井上さんは、すごく真面

目で誠実な感じがするんです。しっかり顔を見て声をかけてくれて、それがちつともいやらしくなくて、スマートで。誠意を感じるんです」

「え？」

ポカンとしてしまった。

「視線？」

「そうです」

深川は恥じらうように微笑んだ。

「それで素敵な人だって」

俺は呆然と見た。

「……深川」

「はい？」

「騙されやしくない？」

「え？」

深川はキョトンとした。

「俺はそんなに真面目じゃないし、誠実でもないよ。俺はどちらかというと面倒くさがりだし、結構横着だし、ずるくて計算高いと思うよ？」

すると深川はにっこり笑った。

「それでも良いです。井上さん、優しいですし。私、ずっと良いなと思ってたんです。笑い方とか、話し方とかも好き。低い声で名前呼ばれただけで、ドキドキします。すごく素敵な声で」

そんなこと、初めて言われた。

「好きです」

深川は真っ直ぐな目で言った。

「嫌ですか？」

潤んだ瞳で見上げられて。

「ううん、嬉しい」

と答えた。

「深川」

「はい」

深川は主人を見つめる子犬の目つきで、俺を見つめる。つい手が伸びて髪を撫でてしまうと、嬉しそうに目を僅かに細めた。

可愛い。

「ごめん、俺、こんなで」

「え？」

深川はキョトンとした。

「がっかりされるかも」

そう言うと、深川は首を左右に振った。

「そんなことはありません。私、ますます井上さんが好きになりました。井上さんは、もっと私のこと信じてください」

キラキラした目で言われて、素直に嬉しいと思った。

「有り難う、深川」

幸せだ。

「嬉しい」

思わず唇がゆるんだ。

心が、気持ちさが、ゆるゆると解けていく。

俺は深川の指を握った。

細くて小さく華奢な指。

ああ、俺。

深川がいてくれて良かった。

俺のこと好きだって言ってくれて、慕ってくれて良かった。

暗かった気持ちさが、払拭され、浮上していく。

俺は単純だ。

深川の笑顔と、声と、優しい言葉に癒されて、高揚していく。

「好きだ」

初めて好きだと、そう感じた。

「本当ですか？」

真っ赤な顔で、深川が俺を見上げる。

俺は頷く。

「うん。深川が好きだ」

なんだか嬉しかった。深川の顔を見ているだけで、幸せな気分になれる。

世界が輝いて見える。

深川が世界で一番可愛い女の子に見えてきた。

とても幸せな気分だった。

「嬉しい」

涙ぐむような顔で言われて、思わず抱きしめたくなった。

だけど抱きしめる代わりに、指を絡ませ、強く握った。

気持ちを、願いを込めて。

深川は幸せそうに微笑んだ。

第二十二話 夢のような幸せ（三）（後書き）

久々更新です。

何か他の小説書いたりしていますが。

暗いの書くと疲れます。

発熱したせいもあります。

無理しない程度に更新頑張ります。

書かなくちゃいけない小説いっぱい持ってます。

明るいのばかりでも、暗いのばかりでも、精神的につらくなるので、色々やらないと、飽きるし疲れてしまいます。

ほとんど病気ですが。

日記は毎日書けませんが、体調・気分次第ですが小説なら毎日書けます。

地震立て続けにあると脅えます。

襖や戸がガタガタ鳴る音や振動は、心と三半器官にダメージ与える気がします。

昔は地震わりと平気だったのに。

能登の地震以来、ヘロヘロな気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9453b/>

予定通りに行かないのが人生だ

2011年8月7日13時29分発行